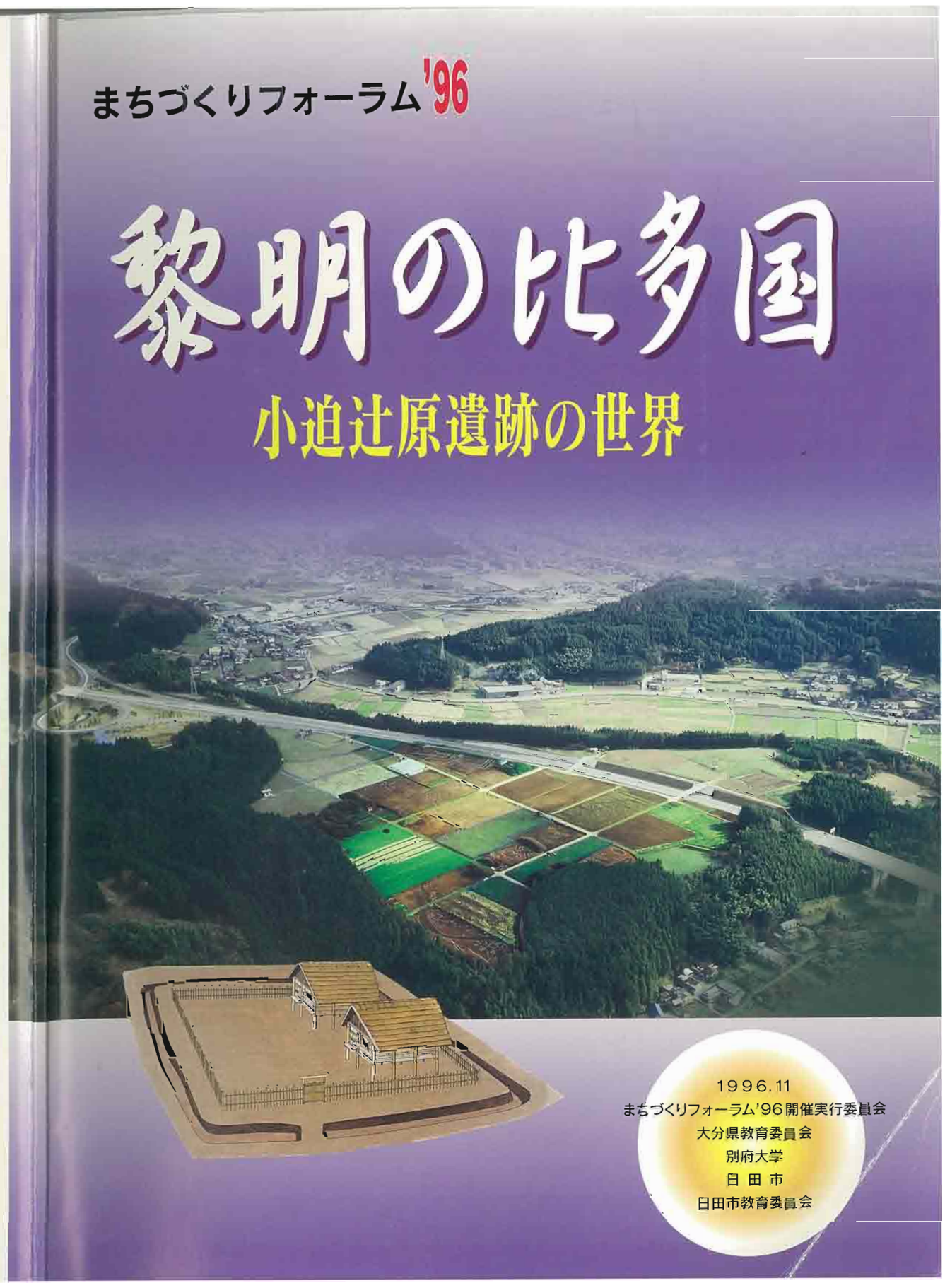
まちづくりフォーラム'96

黎明の比多国

小迫辻原遺跡の世界



1996.11
まちづくりフォーラム'96開催実行委員会
大分県教育委員会
別府大学
日 田 市
日田市教育委員会

まちづくりフォーラム'96

黎明の比多国 －小迫辻原遺跡の世界－

プログラム

11月9日　第1部／小迫辻原遺跡を語る　－ 豪族居館成立の謎に迫る －

12：00 ～ 13：00　受付（日田市民会館）
13：00 ～ 13：30　開会行事
13：30 ～ 14：20　講演「古代日田の輝き」
　賀川　光夫（別府大学名誉教授）
14：20 ～ 15：00　報告「小迫辻原遺跡発掘調査報告」
　田中　裕介（大分県教育委員会主任）
　土居　和幸（日田市教育委員会主任）
15：00 ～ 16：00　基調講演「倭国と居館の考古学」
　阿部　義平（国立歴史民俗博物館教授）
16：00 ～ 17：00　基調講演「弥生・古墳時代の祭儀場」
　宮本長二郎（東京国立文化財研究所国際文化財保存修復協力センター長）
18：00 ～ 19：30　レセプション（会場／ファッションビル「サーブ」）

11月10日　第2部／小迫辻原遺跡の保存整備と活用

8：30 ～ 9：00　受付（日田市民会館）
9：00 ～ 10：00　基調講演「古代日田の首長の館　－小迫辻原遺跡の調査と保存－」
　後藤　宗俊（別府大学教授）
10：00 ～ 12：00　パネルディスカッション「小迫辻原遺跡と日田のまちづくり」
（パネリスト）
　岡村　道雄（文化庁主任文化財調査官）
　高島　忠平（佐賀県教育委員会文化財課長）
　折尾　　学（福岡市埋蔵文化財センター所長）
　川端　正夫（甘木市教育委員会主任技師）
　中川　千年（小迫辻原遺跡研究会会長）
　大石　昭忠（日田市長）
　渋谷　忠章（大分県教育委員会主幹）
（コーディネーター）
　後藤　宗俊（別府大学教授）
12：00 ～ 13：00　休　　息
13：00 ～ 13：30　アトラクション（日田祇園囃子）
13：30 ～ 14：30　対談「歴史がいきづくまちづくり」
　竹下景子（女優）・岡村道雄・大石昭忠
14：30 ～ 14：35　閉会行事

（表　紙）小迫辻原遺跡の全景写真／2号居館遺構の復元図（アジア航測㈱提供・原図 宮本長二郎氏）
（裏表紙）日田盆地の底霧

ごあいさつ

まちづくりフォーラム'96 開催実行委員会
委員長　日田市長　大　石　昭　忠

全国からこのまちづくりフォーラム'96にご参加いただきました皆様方に、主催者を代表して、また日田市民を代表して心からお礼と歓迎のごあいさつを申し上げます。

このフォーラムは、当市の小迫辻原遺跡が日本最古の豪族居館として発見されてより、学術的に大変高い評価をいただいておりますところから、遺跡の歴史的再評価を行い、今後この遺跡をどう保存し、まちづくりに活かすかを探るものでございます。

幸いにも、大分県教育委員会と別府大学におかれましても、この趣旨にご賛同をいただき、行政と大学が共同でこの催しを企画し、文化庁からのご後援をいただき実現することになりました。

日田市は、江戸時代に幕府の天領が置かれ、九州の政治経済の中心地として栄えたところで、商人文化の面影が残ります豆田・隈両地区の歴史的な町並みは、観光地として時のにぎわいをみせております。また、日田市を代表する咸宜園跡やガランドヤ古墳といった史跡の保存整備も、現在進めているところでございます。

このような歴史の街日田市の貴重な文化遺産であります小迫辻原遺跡を、このフォーラムにご出席の講師の先生方や史跡整備の先進地の皆様、そして多くの参加者の方々からの貴重なご意見やお知恵をいただき、将来のまちづくりの参考にさせていただきたいと存じております。

最後になりましたが、本日のフォーラムにご協力いただきました関係の方々に感謝申し上げるとともに、ご参加の皆様方に心から敬意を表し、実り多き成果を期待申し上げごあいさつといたします。

報　告

小迫辻原遺跡発掘調査報告

田中裕介（大分県教育委員会）・土居和幸（日田市教育委員会）

小迫辻原遺跡は福岡県との県境、大分県西部の日田市大字小迫字辻原・経塚に所在する。筑後川の中流域にあたる日田市は、標高約80mの沖積地の周囲を洪積台地や1000m級の山々に囲まれた盆地を形成している。遺跡は盆地北部の通称“辻原”と呼ばれる標高約120m、広さ約14haの台地上に立地する。

遺跡の調査は、県教育委員会が大分自動車道建設に先立つ事前調査として1983年から始まった。1988年には古墳時代初めの居館遺構２基が発見され、その後は1993年まで市教育委員会が遺跡全体の確認調査を行ってきた。こうした10年を越える継続した発掘調査により、この遺跡が旧石器時代から近世にまでおよぶ複合遺跡であることが判明した。

特にこの遺跡では紹介する弥生時代後期後半～古墳時代前期初めの集落遺構以外にも、８世紀後半～９世紀前半かけての方形堀方を基本とし、「コ」字形に整然と配置された７棟の建物跡などが検出され、「大領」と読める墨書土器や転用硯などが出土している。また中世期の庇付きの大型建物や倉と推定される建物などの周囲を溝や柵で区画した環溝遺構６基など、特筆すべき遺構も調査されている。

(1)　調査の概要

この時期の遺構には居館遺構３基、環濠遺構３基、条溝２条、竪穴住居跡約80棟、掘立柱建物２棟などがある。これらは台地の中においてあるまとまった分布状況を示しており、概して東の居館遺構群、西の環濠遺構群、そして両者の間に多数存在する竪穴住居群に色分けできる。

居館遺構　台地の東側で東西に並ぶように発見された、濠や小溝を方形に巡らせ区画し、内部に付属施設が存在する遺構をさす。１号は濠の一辺が東西47m×南北48m、幅約3.5m、深さ約1.5mで、断面が逆台形または「V」字状をなす。濠の内側には幅約40cmの小溝が検出され、四周していたと想定される。付属施設には、東西３間×南北２間以上（6.5m×6.3m＋α）の総柱建物１棟が確認されている。

２号は１号のすぐ西側で確認されたが、互いの濠と濠の間が１mという非常に接近した位置関係にある。濠は東西39m×南北38m、幅２m前後、深さが１m前後の断面が逆台形をなす。濠の内側には濠と平行して幅約50cmの小溝（布掘り）が四周する。濠と小溝の北側には出入口である陸橋部がみられる。付属施設には、東西３間×南北２間（6.5m×5.3m）の同一規模と推定される総柱建物２棟が南北方向に並列して検出されていた。

３号は１・２号から西へ約40m離れた位置にある。濠は一辺約20mで、幅１m前後、深さ50cm前後の断面は逆台形をなす。濠の北側には出入口である陸橋部が存在する。付属施設には、東西３間×南北２間（5.5m×4.5m）の掘立柱建物１棟が確認された。

これら居館遺構から出土した遺物は、１号の鉄鏃１点を除けば土器しかみられず、その量は少なく完形と成り得る資料はない。１号からは布留式最古段階の甕や外来系の円形浮文をもつ二重口縁壺や小型器台などが出土している。２号は外来系の壺のほかに脚付き鉢や甕、３号は布留式甕などの土器が出土している。また、２・３号の濠の南側からは、炭化材と焼土が検出された。

環濠遺構　東側の居館遺構と対峙するかのように台地の西側でまとまって発見された、環濠とその内部の付属施設をさす。１号は台地の北西隅で確認された。３号と重複しているため断片的にしか残っていないが、追跡調査では台地縁辺部で「く」の字状に屈曲し、台地の縁に沿って巡る可能性があることを確認している。濠は幅約2.5m、深さ約１m、断面は逆台形で、「コ」字状の張出部が２ケ所みられる。環濠は全体的に不整形に巡ると考えられ、その規模は東西約150m×南北約100mと推定される。環濠内部には竪穴住居跡６棟が確認されている。濠からは長胴甕など在地の土器群を主体に、畿内伝統的Ｖ様式の特徴をもつ甕や甑などの土器および鉄鏃が出土している。

２号は１号の南側で発見されている。濠は幅約３m、深さ約1.5mで、断面は逆台形をなす。環濠は方形に近い形で、その規模は東西・南北とも約100mである。環濠には「コ」字状の張出部が４ケ所みられ、そのうち南西側の張出部の法面には２つの柱穴が斜めに掘られており、出入口用の橋脚の存在が推定される。また東側中央の張出部は当初直線に掘られた濠を完掘直後に埋め戻し、張出部としている。環濠の内側には幅約30cm、深さ15cm前後の小溝（布掘り）の一部が検出され、濠と同様に並行して巡ると推定される。環濠の内部からは竪穴住居跡２棟が検出された。遺物は濠の中から多量の土器が出土しており、下層からは畿内伝統的Ｖ様式の特徴をもつ甕、土器大量廃棄層である中層からは畿内系の甕・壺・高坏や山陰系の壺・器台などの外来系器種の土器を主体に在地との折衷様式の土器が混在して出土している。庄内式土器の範疇に含まれそうである。

３号は１号とほぼ重なるように掘削されている。濠は幅約4.5m、深さ約1.6mを測る。濠の断面は、内側が緩やかで外側が急な「Ｖ」字形をなし、埋土の堆積状況から外側に土塁の痕跡が確認された。環濠は一辺が100mの規模で、台地の縁辺部に沿ってほぼ方形に巡る。環濠の内部からは、竪穴住居跡か土坑と考えられる遺構が確認されている。遺物は濠中から布留式の特徴を持つ甕などが出土している。布留式最古～古段階並行に位置づけられる。

条溝　１号は台地の中央を地形の起伏に合わせるように弧状に走り、台地（集落）を二分する溝で、総延長約270mを確認している。幅３m前後、深さ約1.5mで、逆台形の断面をなす。埋土の堆積状況から、溝の東側に土塁痕跡が認められる。濠中には土器の大量廃棄層があり、そこからは外来系土器が多く出土している。12号は１号居館遺構の50m東側で確認された。幅約３mの浅い断面「U」字形の溝である。全容がはっきりしないが、１号同様に南北へ延びるものと考えられる。

竪穴住居　調査で確認された竪穴住居は未掘のものを含めると約80棟を数える。大半の竪穴住居跡は環濠遺構の外側に分布し、さらに１号条溝を境としてみるならば全体の75％にあたる60棟がその西側に集中している。竪穴住居の平面形は方形と長方形プランで、主柱穴は２・４本柱が大半を占めており、６本柱の例もある。規模は床面積20～30㎡が中心で、床面積が60㎡を越える大型の竪穴住居が３例ほどある。遺物としては土器が主体で、鉄鏃・鉄鎌などの鉄器や玉類などが出土している。なかでも、居館遺構周辺には、穿孔研磨された内行花文鏡片が廃棄された竪穴住居や複数の鉄鏃が出土した竪穴住居の事例などがあり、ほかとは異なる状況を示している。

掘立柱建物　３号環濠の東側で倉と考えられる１間×２間の掘立柱建物２棟が確認された。

(2)　集落の変遷案

これらの集落遺構を土器の出土量が豊富で、切り合い関係があり、時間的流れが追える環濠を中心に４期に分け、集落の変遷を概観してみる。

［Ⅰ期］この時期は１号環濠が出現しその廃絶までの期間で、概ね庄内式古段階並行期にあたる。１号環濠の内と外に同時期の竪穴住居が存在することから、環濠を中心とした集落内部に社会的、政治的な差が生じていることが窺える。

［Ⅱ期］この時期は環濠遺構が１号から２号へと移り、その廃絶するまでの期間で、庄内式新段階並行期にあたる。２号環濠の内と外に竪穴住居跡がみられることから基本的な集落の様相はⅠ期と同じである。

［Ⅲ期］この時期は布留式最古段階にあたり、環濠遺構が２号から３号へと再び移動する。同時に１号条溝の掘削や１号居館遺構が営まれ、集落の変遷過程のなかでも最も大きな画期にあたる。特に、１号条溝の掘削はそれまでの環濠の内と外という集落構造に加え、１号条溝を境とし西と東に区分けするという、より重層化した集落構造へと変わる。

［Ⅳ期］この時期は布留式古段階並行期にあたり、３号環濠は存続するが居館遺構が１号から２号へと移り変わり、集落が廃絶するまでの期間である。この２号居館遺構への移動は土器からでは想定しがたいが、両居館遺構の濠が共有することなく近接し、構造的に類似する点があり、同じ性格の施設と考えられるこ

とから、同時存在とするよりはむしろ時間的な差としてとらえることができそうである。また、3号居館遺構については時期の特定が難しい。しかし2・3号の構造面において共通性がみられ、1号居館遺構にはみられない焼土と炭化材の検出状況が廃棄行為とも考えられることから、2・3号同時の廃絶により集落は終結するものととらえておきたい。

(3) 調査成果

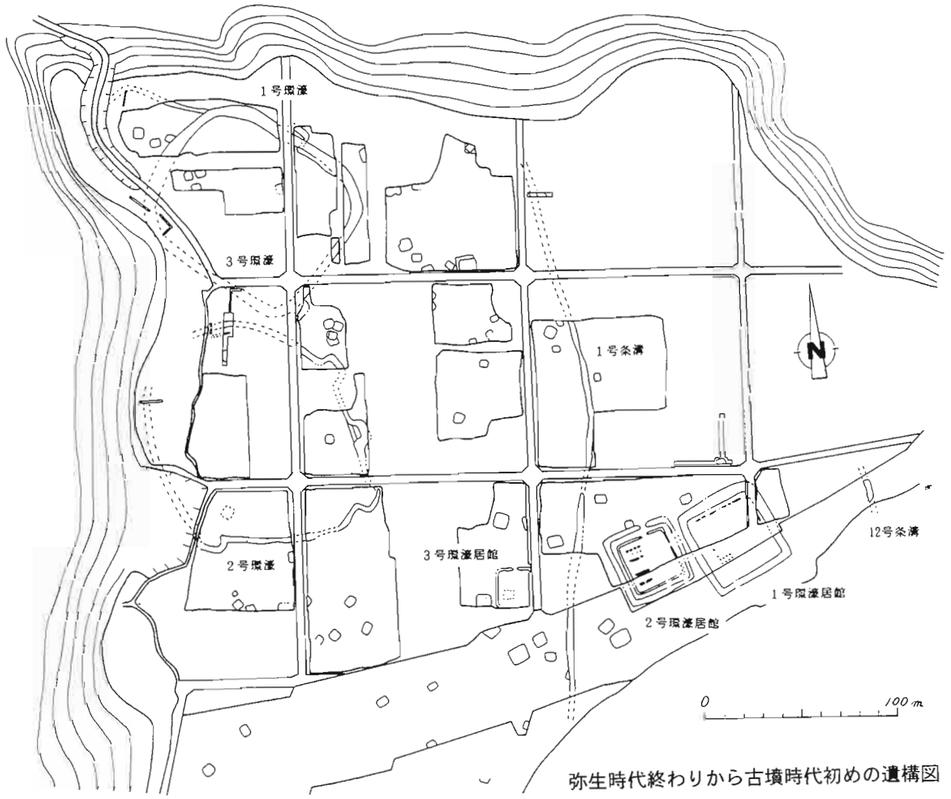
以上、大ざっぱに集落の変遷をまとめてみたが、居館遺構より早く出現すると考えられる環濠遺構は1～3号へと移り変わり、環濠の形態が不整形な形から方形へと変化する。その過程では、濠の幅や深さなどの規模は増し、2号では濠の内側に小溝（布掘り）を巡らせ、3号では土塁を築くなどより強固なものへと発展することが読み取れる。張出部を有する1号はその特徴から佐賀県吉野ケ里遺跡、張出部や小溝（布掘り）を巡らせている2号は大分県小部遺跡にそれぞれ類似している。

次に環濠遺構より後出する居館遺構は台地内でも高い位置に造営されており、重複することなく単独に存在し、1～2号へと変遷する。3基の居館遺構はその規模の差こそあるが、濠を方形に巡らせ、内部施設には建物を採用し、その配置を内部西側に限定する共通性がみられる。また、1・2号での布掘り施設や総柱建物の採用、2・3号での出入口施設や廃棄行為の状況など相互に関連した類似性も看取される。しかしながら、1号条溝を境として位置する1・2号と3号には、布掘施設の有無や建物構造に差異がみられる。このことが両者の性格の違いを現しているものなのか、あるいは時間的な流れの中での変化としてとらえられるものなのか今後の課題である。

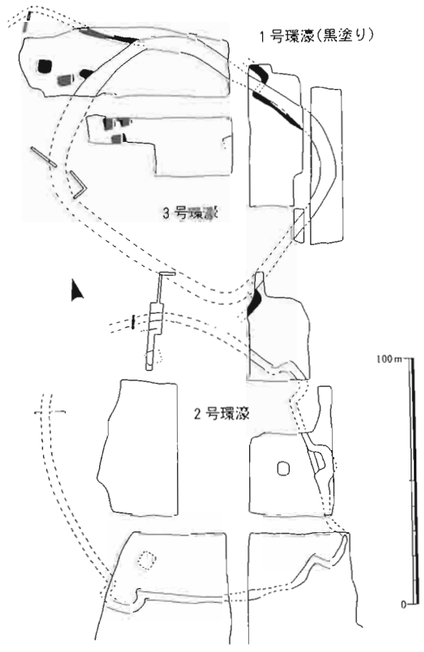
環濠遺構と居館遺構には遺物の出土状況に違いがみられる。それは環濠遺構や条溝では土器が多量に廃棄されているのに対し、居館遺構ではその量は極端に少ない。両者の間に、性格の違いが強く反映しているものと考えられる。

本文は現在整理中の遺跡概要をまとめたもので、久住猛雄（福岡市教育委員会）氏のご協力をいただいている。

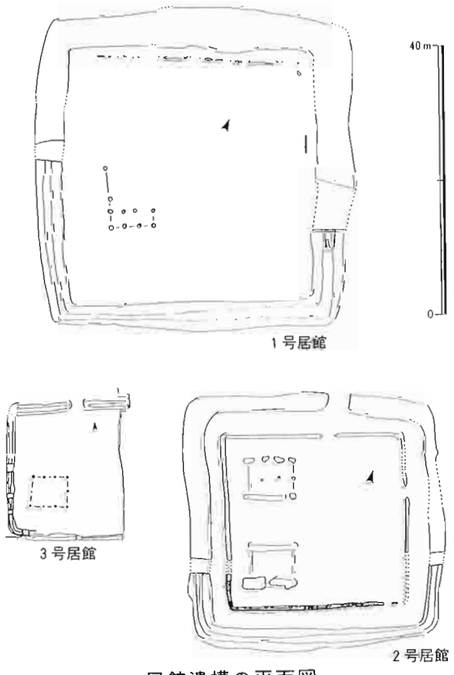
3基並ぶ居館遺構（左より1～3号居館遺構）



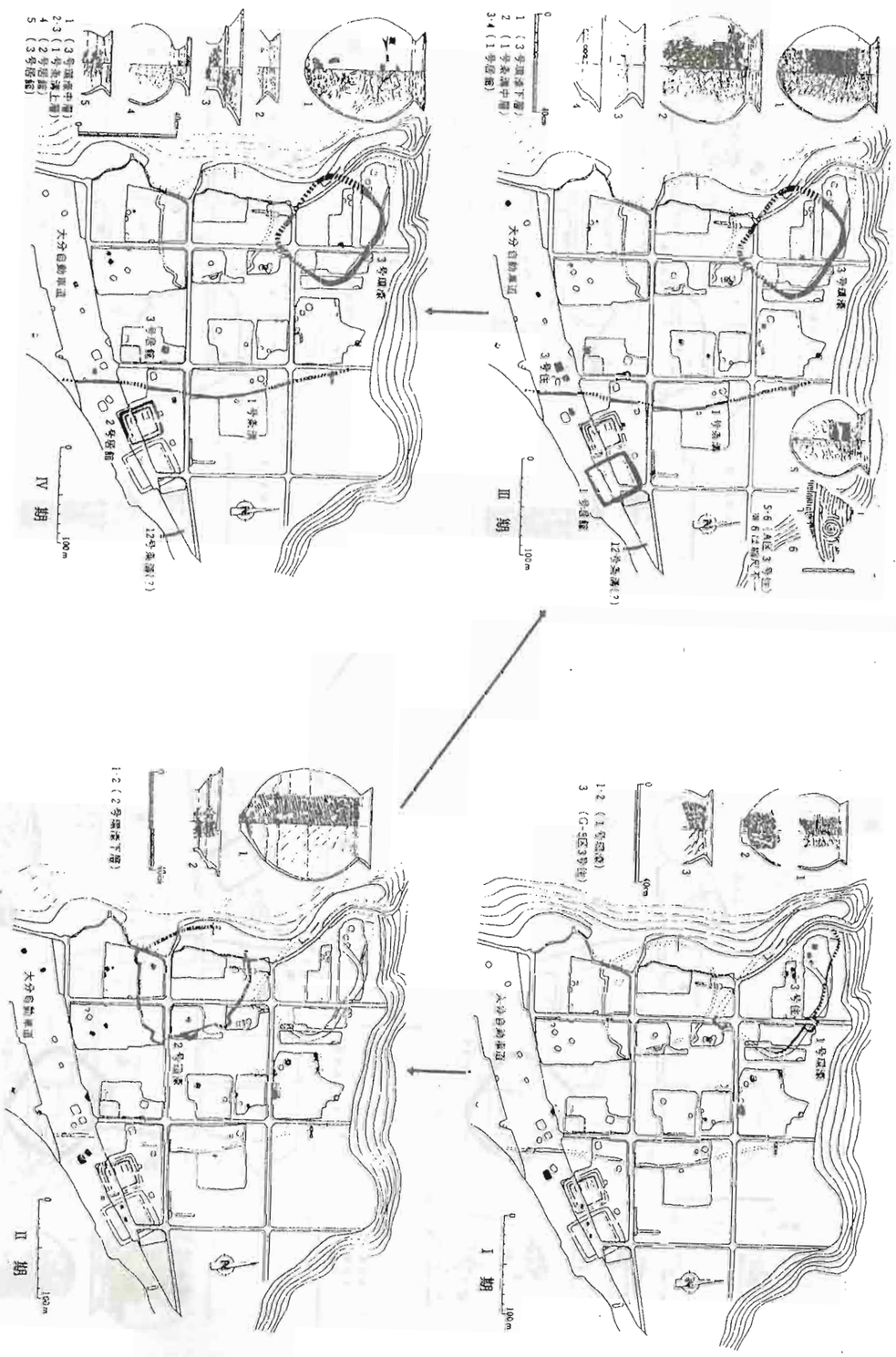
弥生時代終わりから古墳時代初めの遺構図



環濠遺構の平面図



居館遺構の平面図



8ページ　集落変遷図　（Ⅰ期）

正誤表

集落変遷図

第　1　部

小迫辻原遺跡を語る

～豪族居館成立の謎に迫る～

【講　　演】

賀　川　光　夫

・かがわ　みつお
・1923年、栃木県烏山町に生まれる。
・日本大学法文学部卒業。
・現在、別府大学名誉教授
・主要著作に、『大分県の考古学』（吉川弘文館）、『農耕の起源』（講談社）、「縄文晩期農耕論」『季刊考古学』（雄山閣）、「東九州地方における装飾古墳の研究」『別府女子大学紀要３』（別府女子大学）など多数あり。

【基調講演】

阿　部　義　平

・あべ　ぎへい
・1942年、秋田県鹿角市に生まれる。
・東北大学文学部卒業。
・現在、国立歴史民俗博物館考古研究部教授
・主要著作に、『官衙』（ニューサイエンス社）、『再現・古代の豪族居館』（国立歴史民俗博物館）、「宮殿と豪族居館」『古墳時代の研究２』（雄山閣出版）、「古代の豪族居館」『季刊考古学36』（共編）など多数あり。

【基調講演】

宮　本　長二郎

・みやもと　ながじろう
・1939年、大阪府大阪市に生まれる。
・東京大学工学系大学院博士課程中退。
・現在、東京国立文化財研究所国際保存修復協力センター長
・主要著作に、『日本原始古代の住居建築』（中央公論美術出版）、『東大寺』（新潮社）、「飛鳥仏教」『図説日本の仏教・奈良仏教』（小学館）、「飛鳥時代の建築と仏教伽藍」『法隆寺から薬師寺へ』（講談社）など多数あり。

講　演

古代日田の輝き

別府大学　賀川光夫

九州山脈のやや西より、筑後川中流域にある日田盆地は、周囲を低い丘陵にかこまれ、更に標高1000mの山々に囲まれた豊かな照葉樹林地帯である。日田盆地の北西部花月川沖積地に広がる三和教田遺跡は、出土の土器から縄文時代晩期の遺跡である。その一部には泥炭層があり、おびただしいアラガシのドングリが出土した。興味深いことに、縄文時代晩期の深鉢形土器の内壁には、焼き焦げのようになったドングリが数多く付着しているのが見つかった。

ドングリは灰汁抜、水晒しによって、良質の澱粉をつくることができ、これが農耕以前の主な食糧であったとされている。日田盆地周辺は無限に広がるドングリ山が広がり、豊かな資源に恵まれた所であった。三和教田遺跡では、穀物の収穫に使われた石庖丁形石器や木製の杵と思われる道具も出土しているので、北部九州と同じ時期にドングリの加食に加えて穀物の栽培も行われていたとみてよい。

豊かなドングリの採集と、穀物の栽培を併用する縄文晩期は、弥生時代の幕開けの時期で、その重要な遺物の出土は採集から農耕へと移行する生産転換の画期として、三和教田遺跡は得難い事実を証明した。

さて、日田盆地の各所から弥生時代の遺跡が見つかり、昭和29年（1954）盆地北部の吹上台地から合口甕棺墓が調査されたことを契機に、西北九州で問題視されてきた甕棺墓に遺体を埋葬する習俗がこの地方にも及んでいたことが明らかにされた。昭和40年（1965）九州横断自動車道路開設の路線説明の際、天満古墳（前方後円墳）2基を保護する目的で路線変更を求め、建設関係者協議の結果朝日宮ノ原地区、小迫地区の遺跡群をさけて小迫台地南側縁端部を東西に走る路線が決まった。

昭和58年（1983）の大分自動車道路の建設事業に先立ち発掘調査が行われた小迫辻原地区に古墳時代前期の居館跡がみつかったのは昭和63年（1988）で、以後平成5年（1993）までの6年間の調査が実施されてきた。その間に旧石器時代から近世までの遺跡が発見された。その中でも重要なものをあげると、弥生時代の環濠集落、古墳時代前期の集落跡をはじめとして、「大領」という文字を現した墨書土器を出土した8～9世紀の大形建物群や、柵・溝で囲む中世集落跡などがあげられる。

市街地の北に接する吹上遺跡は標高140mの台地で、平成7年（1995）に鉄塔建設に際して事前調査が行われた。調査は鉄塔建設予定の150㎡を対象に発掘された。ここでは弥生時代前期後半から中期にかけての貯蔵穴4基、中期後半の甕棺墓や木棺墓11基、平安時代の経塚1等が見つかり、弥生時代の甕棺墓や木棺墓からは武器（銅剣・鉄剣）、装身具（貝輪・玉類）等が数多く出土した。このことから弥生時代の北部九州特有の武器副葬、装身具着装の首長墓の在方と共通した問題が提起され注目をひいた。

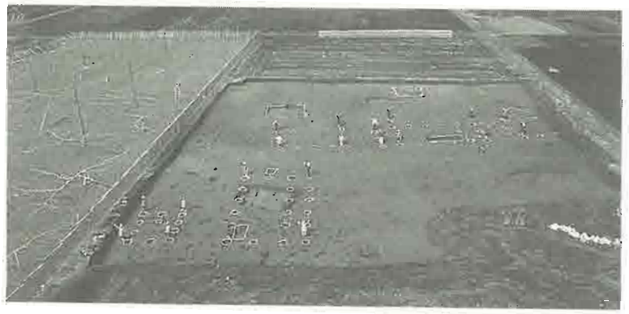
日田の古代を歴史資料でみてみると、日下部氏の活躍が注目される。天平9年（737）の『豊後国正税帳』には日田郡司に、「大領日下部君青嶋、少領日下部連大国、主帳日下部君死」と3名が連記されている。この記録から天平時代の日田郡司の三等の官職は日下部の姓を持つ氏によって独占されている。これは日田盆地に住む複数の首長が日下部君とする姓を名のった可能性があるとみられる。ここで「大領」という墨書文字がみられる土器片がみつかった小迫辻原遺跡の「コ」字形に整然と並ぶ7棟の建物跡が、8～9世紀の首長屋敷（郡衙）と推理して間違いなかろう。

『豊後風土記』には日下部君の本拠地を日田郡刃連郷（靭編）、『和名抄』では父連郷としている。刃連郷は日田盆地の東南にあたり、この地には法恩寺山古墳（古墳時代後期／6世紀）があること等，別姓の日下部別支配地とみることもできる。

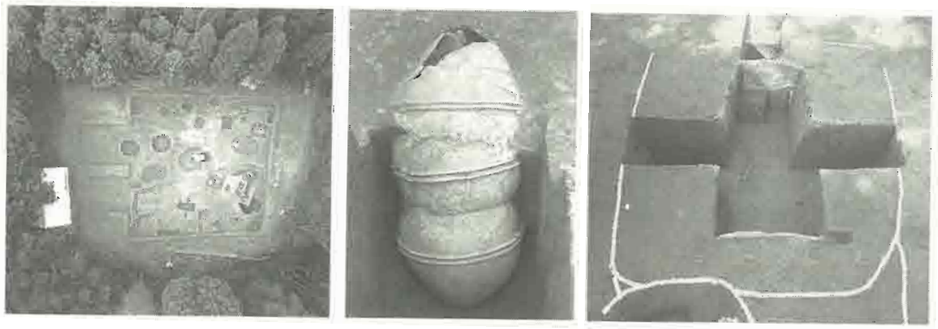
最後に、日田市とその周辺は豊かな照葉樹林に覆われ、資源に恵まれた数々の遺跡や記録が残されている。それらによって輝きにみちた歴史のあとを辿ることができる。そして、その眩しいまでの輝きの歴史の跡を刃連郷の故地、現日高町ダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡にみることができる。

三和教田遺跡出土のドングリが付着した土器

小迫辻原遺跡の古代建物跡



吹上遺跡６次調査



法恩寺山３号古墳の内部（石丸洋氏撮影）

ダンワラ古墳出土の金銀錯嵌珠龍文鉄鏡

基調講演

倭国と居館の考古学

国立歴史民俗博物館　阿　部　義　平

卑弥呼が魏王朝から倭王の金印をもらった239年から、唐王朝で遣唐使が日本国を名のる702年まで、倭国時代であった。倭人と小領域の国々が統合に向う弥生終末期と、律令国家形成期の７世紀代を別にして、古墳時代の約300年間は、正に倭国の時代で、世界最大級の墓である前方後円墳も含め、各地に各種大小の古墳が築かれ、特異な時代様相を呈した。墓の形や武器・祭具等を含む埋納品から、大和王権を中心に在地首長層が連合した国家の在方や推移が盛んに研究されている。中国の州県制と異なる日本の国郡制の基盤も形成された。一方、古墳造りの主体者の実際の祭政の場、階層社会の支配層の居住実態等は、近年までそれほど追及されてこなかった。無言の秩序を示す古墳は、あくまで墓制の結果奥津城であることを考えると古墳で時代を語るに限界もあった。竪穴住居からなる村落の研究も、全国的に平穏で均質な社会像しか語ってくれなかった。ここ20年来の居館や集落の大発掘は、その状況を突き破ったといえる。

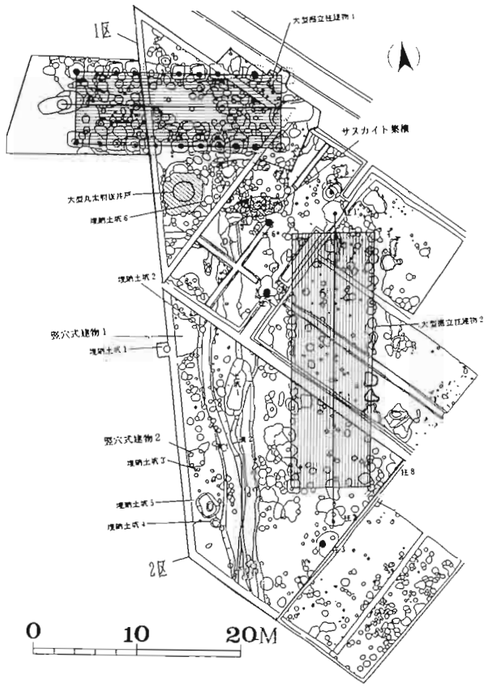
1974年の熊本県西岡台遺跡の調査を皮切りに、居館遺構が全国的に発見され、それが古墳時代の首長層の祭政の場、居住の場等であったこと、そして古墳に対応する形で全国的に存在したことが知られるに至った。1981年に報じられた群馬県三ツ寺遺跡は、居館の性格と実態がはっきり認識された初例であり、居館周辺での広大な農地開拓や村落の建設、前方後円墳等の築造を含め、基地としての居館の在方が把握できた。大型の掘立柱建物を囲む広庭や屋形井戸、樋を用いた水道やその先の石敷きの場、幅40mに及ぶ濠や石垣や塀列、櫓があったとみられる方形突出部や木橋など様々な遺構と、金属器の加工や形代を用いた祭祀を示す出土品等から、祭政と生活の実態が復元された。盛土された居館内部と濠を含めた外径は160m四方もの規模であった。

一般に居館を把握する手がかりは、外部を方形に囲む箱掘りの濠の存在であったが、次第にその内外に土盛りがあり、その上に柵列や塀、各所に櫓や橋や門等を構え、斜面に石垣を張ったり、突出部や土橋を付ける例も知られてきた。かかる構造は、律令時代以降の西日本の山城、東日本の城柵と比べて、小規模で防備施設も簡素であるが、軍事能力を備えた施設の側面を明示している。中世武士の居館と共通性もあり、少領域に同様に根を張った在地の軍事・祭政の権力を誇示するものであった。その他、溝や柵で簡単に囲ったり、外囲施設を欠く大規模な掘立柱建物や各種施設群が展開していたことも知られつつある。居館を含めて支配層が展開した施設全体の呼び方や区分、性格付けや変遷の研究が大きな課題になる。

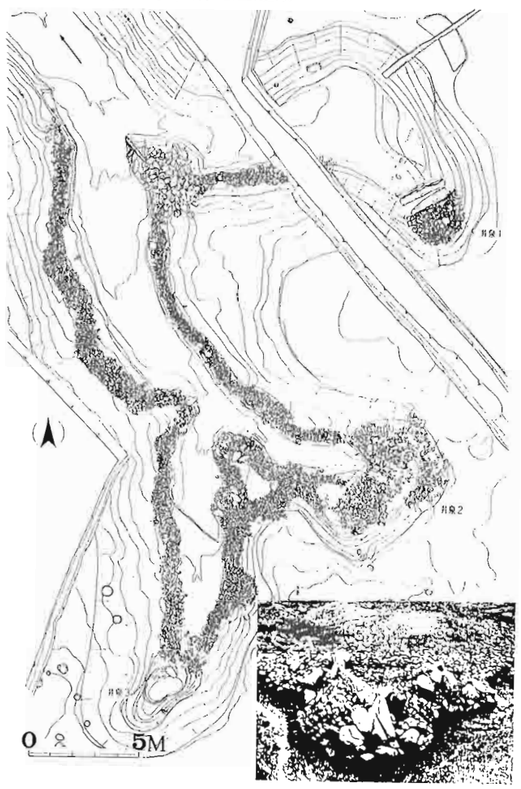
外囲施設の内部には、三ツ寺遺跡のように各種施設が設けられ、倉庫群や内部区画施設、竪穴式建物や工房がみられるものもある。その最大の規模のものは、群馬県原之城遺跡の南北径160mをこす例、最小のものでは宮城県伊治城遺跡の内径20m程度のものまでの差がある。小迫辻原遺跡の４世紀初頭頃から６世紀中葉以降の例までの時期的展開が認められている。居館の規模は遠からぬ所に営まれたその主人公が葬られる古墳の形や大きさとも関連をもつと主張されている。居館の最も発達した大規模なものは、倭国の大王の宮殿であったとみられるが、それ自体はまだ発見されず、古墳上の家形埴輪の配置等からしのばれているにすぎない。居館内外に展開した施設や規模からみて、居館内に収容される人数は限られ、支配階層に属したと判断され弥生時代での集落を巡る環濠とは形も意味も違っているが、居館成立には弥生時代からの前史があると予想した研究が続けられ、吉野ケ里遺跡例等が注目されている。居館内で水と関わる祭祀が見られる例があるが、その先駆事例は弥生時代中期末の池上曽根遺跡でもみられ、古墳時代前期の三重県城之越遺跡では水源を祭祀の場として石で整備した状況もあり、居館祭祀との関連を考えさせる。

倭国の北には、別の大きな文化圏が成立しつつあり、居館で交流していたことが北端の伊治城遺跡例で知られる。居館は南北との交流や海外の文物の受け入れ、軍事行動や造墓の基地であったことになろう。そこでの人々の活躍した姿は、人物埴輪から伺える。

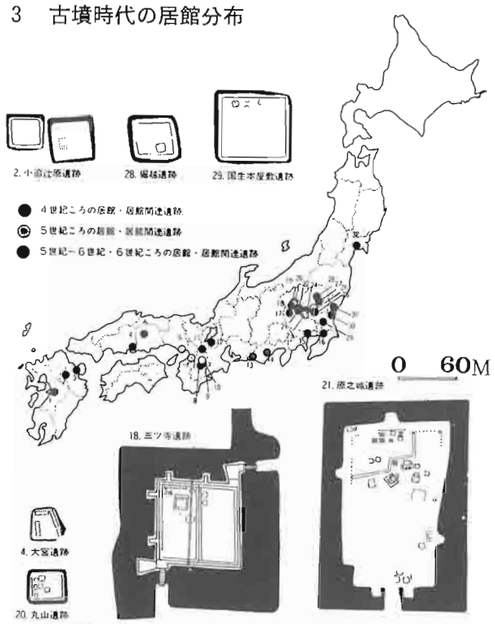
1　大阪府池上曽根遺跡



2　三重県上野市城之越遺跡



3　古墳時代の居館分布



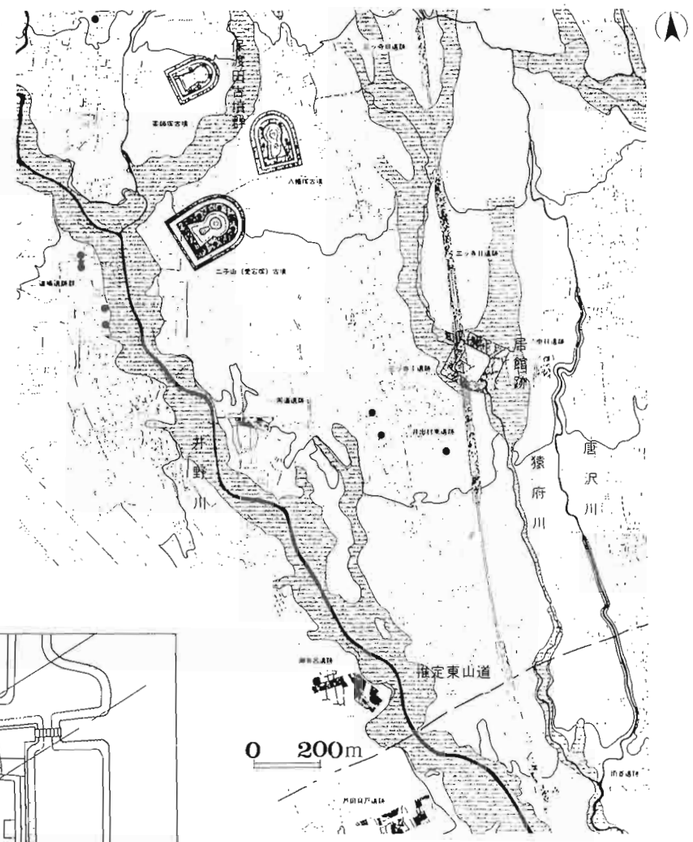
1. 西岡台遺跡
2. 小迫辻原遺跡
3. 小部遺跡
4. 大宮遺跡
5. 谷尻遺跡
6. 松野遺跡
7. 大園遺跡
8. 名柄遺跡
9. 藤原宮下層遺跡
10. 布留遺跡
11. 森山遺跡
12. 野尻遺跡
13. 大平遺跡
14. 小深田遺跡
15. 赤羽台遺跡
16. 高岡遺跡
17. 木宿・郷土遺跡
18. 三ツ寺遺跡
19. 荒砥荒子遺跡
20. 丸山遺跡
21. 原之城遺跡
22. 梅木遺跡
23. 水久保遺跡
24. 成塚遺跡
25. 下犬塚遺跡
26. 成沢遺跡
27. 四斗蒔遺跡
28. 堀越遺跡
29. 国生本屋敷遺跡
30. 長谷遺跡
31. 森戸遺跡
32. 山前遺跡

4　中溝・深町遺跡

5　伊治城遺跡

6　三ツ寺遺跡

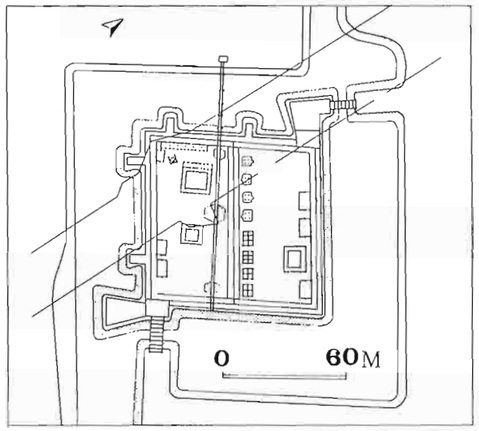
三ツ寺遺跡と関連遺跡



1. 三ツ寺遺跡の周辺の地形と遺跡
2. 芦田貝戸遺跡の畑の畝の遺構
3. 同道遺跡の水田の遺構

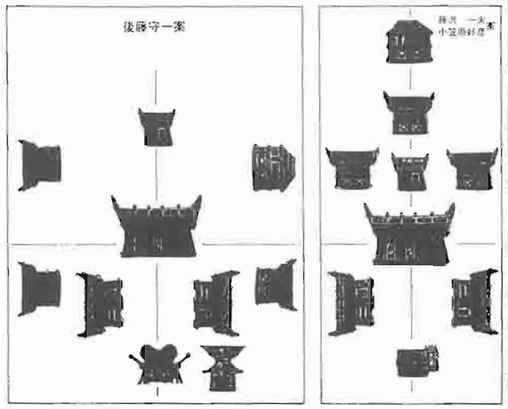
7　三ツ寺遺跡

三ツ寺遺跡の居館復元図



8　原之城遺跡　最大の居館の再現

9　埴輪と居館　赤堀茶臼山古墳の埴輪配置を考える



基調講演

弥生・古墳時代の祭儀場

東京国立文化財研究所　宮　本　長二郎

弥生時代の環濠集落や、古墳時代の豪族居館とされる全国各地の支配者層の集落遺跡の発掘調査例は多いが、その全体像を示す例は意外に少ない。しかし、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての大規模集落遺跡には、その中郭施設であることを示す大型の高床・平屋建物で構成された一郭の発見例が近年増加している。本稿ではこのような一郭を祭儀場とみなして、その配置形式・建築形式・機能とその変遷について分析を試みる。

表は弥生時代から古墳時代前期にかけての祭儀場と推定される遺構一覧表である。10遺跡16遺構があり、いずれも濠・溝・塀で区画され、区画内に１～３棟の高床建築や平屋建物を建てている点で共通し、また、これらの遺構は弥生時代には環濠集落内に、古墳時代には豪族居館に付設され、首長が主祭して祭式儀礼を行う場であったと考えられる。

１）遺構概要

① 長崎県原の辻遺跡（弥生時代中期から後期）の祭儀場は環濠内中央の小丘陵頂部を塀で囲い、北半部に小高床祭殿群と広場、中央に高床祭殿とその南に平屋建物の付属祭殿を直列させる。

② 大阪府池上曽根遺跡（弥生時代中期後半）の祭儀場は環濠内のほぼ中央にあり、埋納広場の北に東西棟の棟持柱付き大型高床祭殿と、東に南北棟の大型平屋脇殿が建ち、東面は溝で区画され、広場には祭域四至を示す立柱がある。

③ 佐賀県吉野ヶ里遺跡（弥生時代後期）の祭儀場は環濠内の北内郭に二重の環濠、土塁を巡らせ、中央に方三間総柱の大型高床祭殿と竪穴住居を設ける。

④ 滋賀県伊勢遺跡（弥生時代後期）の祭儀場は環濠の中央東寄りに方形区画の塀を巡らせ、南庭を中心にして北中央に入母屋造高殿、西に棟持柱付高床祭殿、西北隅に平屋脇殿を配置する。

⑤ 滋賀県針江川北遺跡（弥生時代末期）の祭儀場は、環濠内中央に円形区画の竪板塀を巡らせ、区画内中央に板状柱の高床（又は平屋）祭殿１棟と区画外東方に棟持柱付高床祭殿がある。

⑥ 京都府中海道遺跡（弥生時代末期）は弥生時代中期から古墳時代前期にかけての拠点集落であるが、集落の状況は明らかでないため、祭儀遺構の集落内での位置関係は不明。４面庇付方４間、北孫庇付祭殿、北中央に土橋を設けて出入口とする。

⑦ 大分県小迫辻原遺跡（弥生時代末期～古墳時代初頭）の第Ⅲ・Ⅳ期（布留式期）に出現する１～３号居館が祭儀場である。台地上の西北隅に位置する３号環濠がこの時期の首長居館で、台地中央を南北に走る１号条溝によって集落は東西に２分される。２号祭場が東側に、３号祭場が西の居館側にあり、１号がⅢ期に、２・３号がⅣ期である。

１号祭場は方形区画の濠の内側に柵を巡らせ、内部の西辺中央部には南北４間、東西３間の総柱型高床建物が建つ。柵や建物の残存状況から、濠の内側は後世に削平を受けており東方にも同規模の高床祭殿が並立していた可能性がある。

２号祭場は１号祭場より一回り規模縮小されるが、同じ構えを持ち、場内西半分の南北に３×２間、総柱の東西棟高床祭殿を並立させ、東半分をその前庭として、前庭北方に出入口を設ける。

３号祭場は小規模で柵を設けずに溝で方形に区画された祭場内の南西部に３×２間の平屋祭殿が建ち、２号祭場と同様に北面に出入口を設ける。この祭場の西側に沿って２×１間，南北棟の高床建物と竪穴住居が南北に立ち並び、祭場の付属建物と考えられる。

⑧ 静岡県大平遺跡（古墳時代前期）は台地縁辺部に沿う大集落址で、時期の前後・併存関係は分からないが、４つの方形区画施設があり、１箇所は濠と掘立柱塀で、他の３箇所は柵囲いである。これらの祭場内の建物は前者が独立棟持柱付き高床祭殿で、後者は２～３棟の平屋祭殿による構成をもつ。

⑨ 静岡県小黒遺跡（古墳時代前期）は静岡平野南部の微高地上に営まれた拠点集落で、居住域東端部の低地水田との間に一辺20m程の周溝を巡らせ、南辺と西辺を竪板塀で区画し、２棟の独立棟持柱付き東西棟高床祭殿が南北に並列する。これらの施設は旧墓域の周溝を掘り直して利用したもので、祖先崇拝の廟所的な祭儀場であったと考えられる。

⑩ 群馬県新田東部工業団地遺跡（古墳時代前期後半）は扇状地端部の微高地上に営まれた拠点集落である。集落の中心部の状況は分からないが、その祭儀場施設が前後する時期の竪穴住居群と重複して発見された。

祭場は南と北に分かれ、南祭場は東西に長い長方形区画の濠が回り、北中央に出入口、中央を広場として東西に４×１間の南北棟高床祭殿を対峙させる。濠は底が浅く平坦で、外側面に凹凸を設ける形式から、防御的な機能ではなく、祭殿と水面による祭場を演出している。北祭場４面庇付き南北棟建物とその西方に２基の集石土坑がセットになり、区画施設はないが、南に目隠塀を設け、東方は南北溝が結界となっている。

２）祭儀場の構えと祭殿建築

以上の10ヶ所の遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期の例である。祭儀場はもちろん縄文時代や古墳時代中期以後にも存在するが、弥生時代～古墳時代前期の祭儀場には、区画施設や建物構成などに共通性が見られる。

立　地　弥生時代には環濠集落内の中心的な施設の一つとして祭儀場を設けるが、福岡市吉武高木遺跡（弥生時代中期初頭）や佐賀県鳥栖市柚比本村遺跡（弥生時代中期）のように集落外の墓域に建つ超大型建物も葬送儀礼に関わる祭殿と想定され、葬送儀礼以外の祭事は環濠集落内の祭儀場で行ったものと考えられる。

この傾向は古墳時代にも引継がれるが、中海道・小黒・新田東部工業団地遺跡のように祭儀場は必ずしも集落の中心部にはなくて、端部に位置するものが現われ、小黒遺跡では旧墓地上に祭場を設けて葬送儀礼も兼ねた祭儀場であった可能性がある。

また、小迫辻原遺跡では祭儀場を外郭濠の内外に分けて設けるなど、祭場の性格がやや弥生時代と比べて変化していることが窺える。

区画施設　弥生時代の祭儀場の区画施設は地形に合せた様々な形態をとるが、池上曽根遺跡では方位は東西南北に合せ、伊勢遺跡では方位に合せた方形区画塀を設け、この系統が弥生時代末期～古墳時代前期には主流となって、濠や柵による方形区画をとるようになり、出入口を北辺中央に設ける例が多いことなど、全国的に共通性が認められる。

祭　殿　弥生時代の祭殿は高床建築を主殿、平屋建物を脇殿とする構成が成立する。主殿の形式は畿内地方では独立棟持柱を備え、北九州地方では棟持柱をもたないという地方差がある。また、伊勢遺跡では主殿２棟が１棟の脇殿を共有し、形式を異にする入母屋造主殿と、棟持柱付き切妻造主殿は祭儀の内容によって使い分けたものと考えられる。針江川北遺跡でも区画施設内の平屋祭殿と区画施設の西に近隣する棟持柱付高床祭殿が併存して同様の機能的使い分けが認められ、弥生時代後期にこのような祭殿の機能分化が始まったと考えられる。

弥生時代末期以後には、中海道・小迫辻原③・大平①③④・新田東部工業団地②のように独立した平屋祭殿域が発生し、小迫辻原遺跡や新田東部工業団地遺跡では高床祭殿域と共存して祭場の機能分化がより明確な形で現われる。

古墳時代前期の高床祭場の建築形式は、大平②が棟持柱付き高床祭殿１棟を柵囲形式とするほか、小迫辻原・小黒・新田東部工業団地遺跡はいずれも２棟の高床祭殿を並列させている点で共通する。

同一祭場内に２棟の高床祭殿をもつ例は伊勢遺跡にはじまり、建築形式を違えて異なる祭事を行ったと

考えられるのに対して、古墳時代の例は同一形式の高床祭殿を並列させる点から、祭儀機能の差を示すのではなく、あたかも複数の祭神を奉っているような形式を示す。

3）考　察

弥生時代から古墳時代前期にかけての祭儀場遺構は、以上のように高床祭殿を中心にして大きく変質していることが窺える。とくに古墳時代前期の2棟並立祭殿に焦点をあててその性格について考察を進める。

独立棟持柱付き高床祭殿は伊勢神宮本殿との類似から、後世の神社本殿建築の一形式として継承されることは容易に推察できる。2棟並立祭殿についても、これらを神殿と見立てれば、中世以後の並立本殿の例はかなり多いが、「古事記」に記される住吉大社に注目してみよう。

神功皇后は朝鮮征伐が3神の助力によって勝利したことを記念して住吉大社を創始し、3神と皇后自身を奉る4殿を造ったと伝える。現本殿は4棟とも玉垣・端垣を建物廻りに巡らせた切妻造高床建築である。細部形式は古墳時代とは異なるが、2棟並立祭殿と類似の形式をもち、時期的にも古事記の創立伝承と一致する点で、この頃には複数の祭神を奉る形式が成立していたことを物語る例といえる。

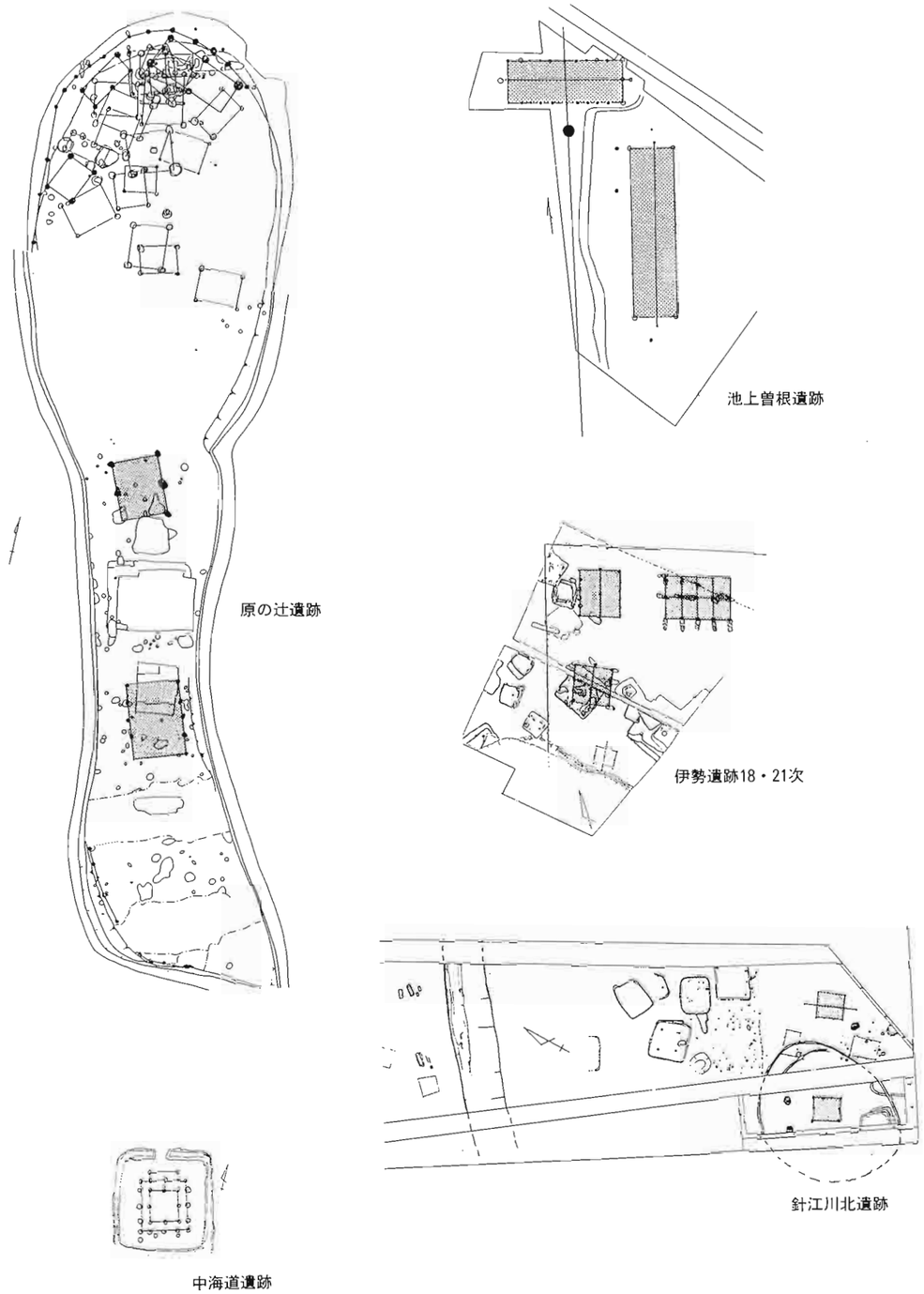
また、住吉大社本殿の建物に近接して塀を巡らす形式は現在では他に類例がなく、古墳時代の畿内地方の竪穴住居などの類例や、針江川北遺跡や大平遺跡②のように、単体の祭殿を塀で囲う例があり、住吉大社本殿の形式は古墳時代以来の形式を保っている可能性が指摘できる。

棟持柱付き祭殿や2棟並立祭殿が神社本殿の祖形であるとしても、その祭神や儀礼について、あるいは他の平屋祭殿との役割分担などは不明で、今後の課題は多いが、少なくとも祭儀場の構えや建築形式の一端を明らかにし得たと思われる。

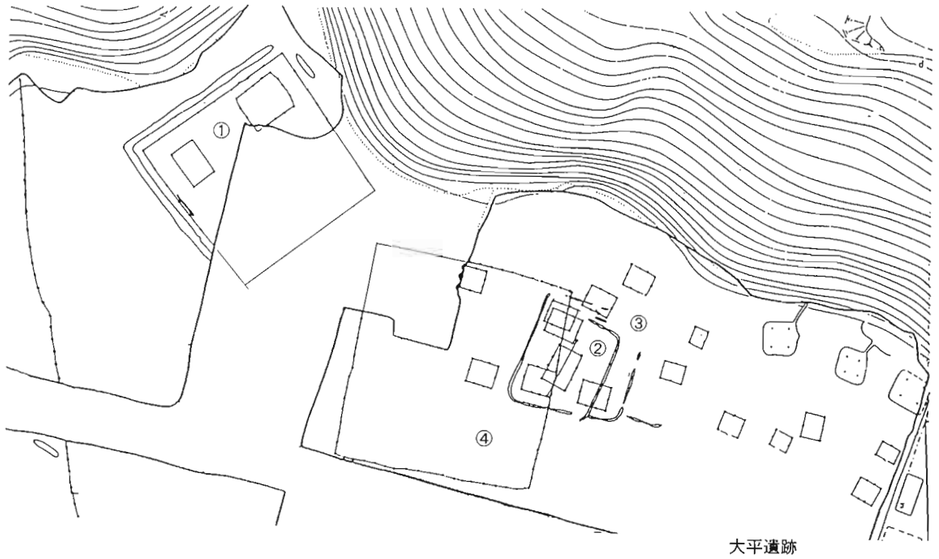
祭儀場遺構一覧表

所在	遺跡名	時期	区画施設	区画規模（m）	出入口	祭殿建築 高床（間）	祭殿建築 平屋（間）
長崎県	原の辻遺跡	弥生中期	掘立柱塀	80×10～20	南	2×1	4×1
大阪府	池上曽根遺跡	弥生中期後半	溝・四至結界柱		（南）	10×1・棟	(19)×1・棟
佐賀県	吉野ヶ里遺跡北内郭	弥生後期	2重環濠・（土塁・柵）	100×90	南	3×3・総	竪穴住居
滋賀県	伊勢遺跡18・21次	弥生後期	方形掘立柱塀	30×40	（南）	4×2・総 3×1・棟	5×1 3×2・互平柱
	針江川北遺跡	弥生末期	円形竪板塀	30×30		外3×1・棟	――
京都府	中海道遺跡	弥生末期	方形濠	15×14	北土橋	――	4×4・4面庇
大分県	小迫辻原遺跡①	古墳初頭	方形濠・柵	38×36		4×3・総	――
	〃　②	〃	方形濠・柵	30×30	北土橋	4×2・総・並	――
	〃　③	〃	方形濠	19×19	北土橋	外2×1・外竪	3×2
静岡県	大平遺跡①	古墳前期	方形濠・塀	30×(30)		――	4×4・1×1
	〃　②	〃	方形柵	17×15		3×1・棟	――
	〃　③	〃	方形柵	19×18	西	――	3×2・3棟
	〃　④	〃	方形塀	37×34		――	3×2・2棟
	小黒遺跡	4世紀中頃	方形濠・竪板塀	21×18	西北隅	5×1・並	――
群馬県	新田東部工業団地遺跡①	4世紀後半	長方形濠	44×19	北土橋	5×1・並	――
	〃　②	〃	――	――	――	――	4×4・4面庇

（註）空欄は不明。総は総柱型、棟は独立棟持柱付、外は区画施設外、並は2棟並列。（　）は推定。



祭儀場遺構図1



大平遺跡

新田東部工業団地遺跡

祭儀場遺構図 2

第　2　部

小迫辻原遺跡の保存整備と活用

【基調講演】

後　藤　宗　俊

・ごとう　むねとし
・1938年、大分県日田市に生まれる。
・九州大学文学部卒業。
・現在、別府大学文学部教授。
・主要著作に、『東九州歴史考古学論考』（山口書店）、「変容する農村景観をみつめて」『中世のムラ』（東京大学出版会）、「豊後における古道と駅制」『風土記の考古学』（同成社）など多数あり。

【パネルディスカッション】（コーディネーター）

後　藤　宗　俊

（パネリスト）

岡　村　道　雄／高　島　忠　平／折　尾　　学
川　端　正　夫／中　川　千　年／大　石　昭　忠
渋　谷　忠　章

【対　　談】

竹　下　景　子
岡　村　道　雄
大　石　昭　忠

基調講演

古代日田の首長の館

－ 小迫辻原遺跡の調査と保存 －

別府大学　後　藤　宗　俊

遺跡発見・保存への取り組み

1988（昭和63）年１月、「小迫辻原遺跡で日本最古の豪族居館発見」の記事が、新聞の一面に踊った。私は当時、大分県教育委員会で担当主幹として日本道路公団はじめ関係機関との協議にあたった。周知のように高速道路はきわめて直線的な線形を要求される工事である。予定地内で遺跡が発見された場合、路線変更による保存はきわめて難しい。しかし発見された遺跡は国指定に相当する重要な遺跡である。その取扱をめぐって、その後２ケ月にわたる白熱した協議が進められた。

その結果、(1)自動車道本線工事の工法変更により２号居館を完全保存し、１号居館の一部を記録保存とする。(2)事後の方針として、１・２号居館遺構の全容を確認し、県史跡指定として保存する。(3)さらにその周辺に展開する民有地での全面的な確認調査を実施し、その成果をふまえて遺跡全体の保存策を検討する、という方向が関係機関の間で確認された。高速道路内の調査という難しい条件の中で、これだけの約束が出来たのはひとつの成果であった。

その後日田市教委の計画的かつねばり強い遺跡確認調査が続けられた。確認調査は小迫辻原の台地約10ヘクタールのほぼ全域におよび、開発に先行する遺構確認調査としては、かつてない規模の調査となった。これらの調査の結果、国指定史跡として、永久に保存されることが決定した。

環濠居館に首長の原像を読む

小迫辻原遺跡の環濠居館跡は、発見の当初から、わが国最古の古墳時代豪族居館跡として注目されている。ただここにどのような首長が存在したかとなると多くの難しい問題がある。環濠居館跡は台地の南縁部に近い位置に東から１号、２号、３号の順で並んで検出されている。これらの遺構は、(1)それぞれがきわめて短い期間に建て替えられていること。(2)布掘りの柵（または塀）で囲まれ、内に掘立柱建物１～２棟を配置するだけというシンプルで生活色の薄い施設であること等から考えて、ここにきわめて祭祀的性格の強い首長像が浮かぶことは確かであろう。ここではこの三つの環濠遺構を〈豪族の居館〉と断言してしまうのは躊躇する。あえていえば〈首長がその首長権の行使にかかわって祭祀を執り行う施設＞と規定しておきたい。ここで想定される首長のイメージは、『魏志』倭人伝に＜鬼道を事とし能く衆を惑わす＞とされた卑弥呼のイメージに近いであろう。その地域的、在地的存在が浮かびあがるのである。この場合、地域における現実の支配は、この環濠の外にいる人物なり階級を想定しなければ完結しない。そういう意味でいえば、小迫辻原遺跡において、これらの居館の周辺に、これと同時か、あるいはいくらか先行する環濠集落が検出されたことは大きな意味を持っている。ここでは弥生時代の環濠集落の中から、地域の支配にあたる宗教的、司祭者的人物とそのための施設が創出される過程が表出されているといえる。そういう意味で小迫辻原遺跡はわが国の先史・古代の階級社会形成期における「首長」の原像を明かす貴重な遺跡といえるのである。

なお首長ということでいえば、このほかに台地中央部で、八世紀末から九世紀にかけての掘立柱建物跡が検出され、郡司大領の「大領」と読める墨書を持つ須恵器片が出土していることも注目される。

弥生時代のクニから古墳時代の國へ

1995（平成７）年７月、小迫辻原遺跡の歴史的価値をさらに高める劇的な発見があった。吹上遺跡の弥生の甕棺墓群の発掘である。ここではわずかな面積の中から青銅器をともなう弥生時代中期の大型の甕棺

などが発掘された。すなわち第4号甕棺からはゴホウラ貝の腕輪をした成人男子の人骨が出土、中細銅戈と鉄剣に加え多量のガラス玉が副葬されていた。

また2号甕棺墓からは銅戈、5号甕棺墓から両手にイモ貝の腕輪をつけた女性人骨、1号木棺墓から把頭飾付銅剣が出土している。吹上遺跡は、もともと県下でも屈指の弥生集落として知られているところであるが、今回の銅剣・銅戈や貝輪の発見により、ここに福岡平野のクニグニときわめて密接な関係を持ち、名実ともに日田を代表する集落とそのリーダーの存在が浮かび上がったのである。

小迫辻原遺跡はこの吹上遺跡と対面する位置にある。小迫辻原遺跡と吹上遺跡。ここには全国にもない規模と内容で、わが国におけるクニと首長の出現と発展のプロセスを証す遺跡が並んでいるわけである。

吉野ケ里・平塚川添・小迫辻原（環濠集落ネットワークの可能性）

小迫辻原遺跡は整備公開という点からみても、大きな可能性を持ち限りない夢をいだかせる遺跡である。何よりこの遺跡は吉野ケ里遺跡、平塚川添遺跡と高速道路で短時間に往来できる位置にある。吉野ケ里－平塚川添－小迫辻原遺跡。そこに高速道路で結ばれた環濠集落・居館遺跡公園ネットワークが生まれる可能性が大きく広がっている。

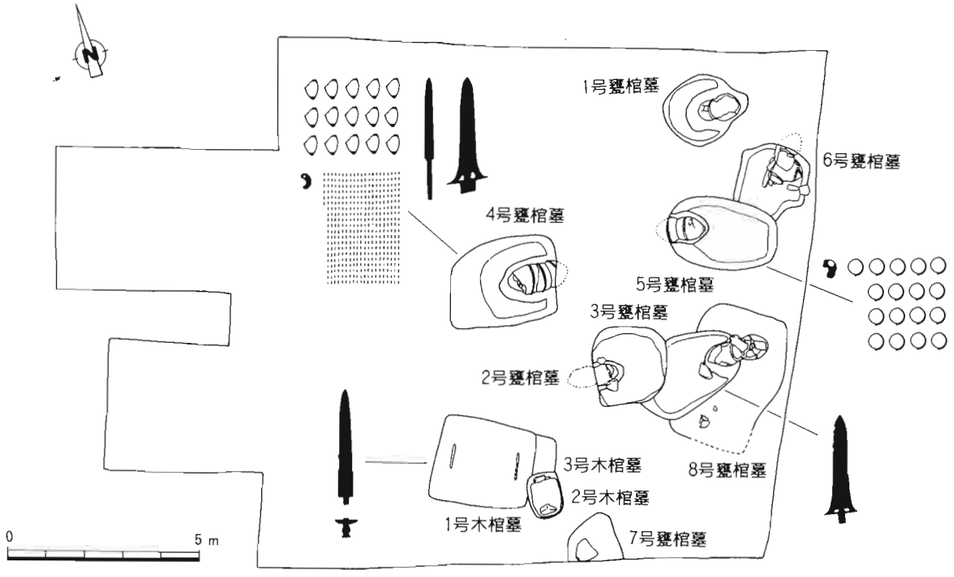
ただ吉野ケ里遺跡と平塚川添遺跡は、いわば開発にともなう緊急調査からの、起死回生の逆転による保存であった。当然、その整備活用方針の決定にあたって、多くの厳しい制約や外圧があったと思われる。

これに対し小迫辻原遺跡は、徹底した確認調査の積み上げによって全貌が明らかにされたものであり、整備活用にあたって、当局は比較的フリーハンドを持っているといえる。吉野ケ里と平塚川添に学びつつも、独自の主体性ある自由な発想での整備構想が望まれる。

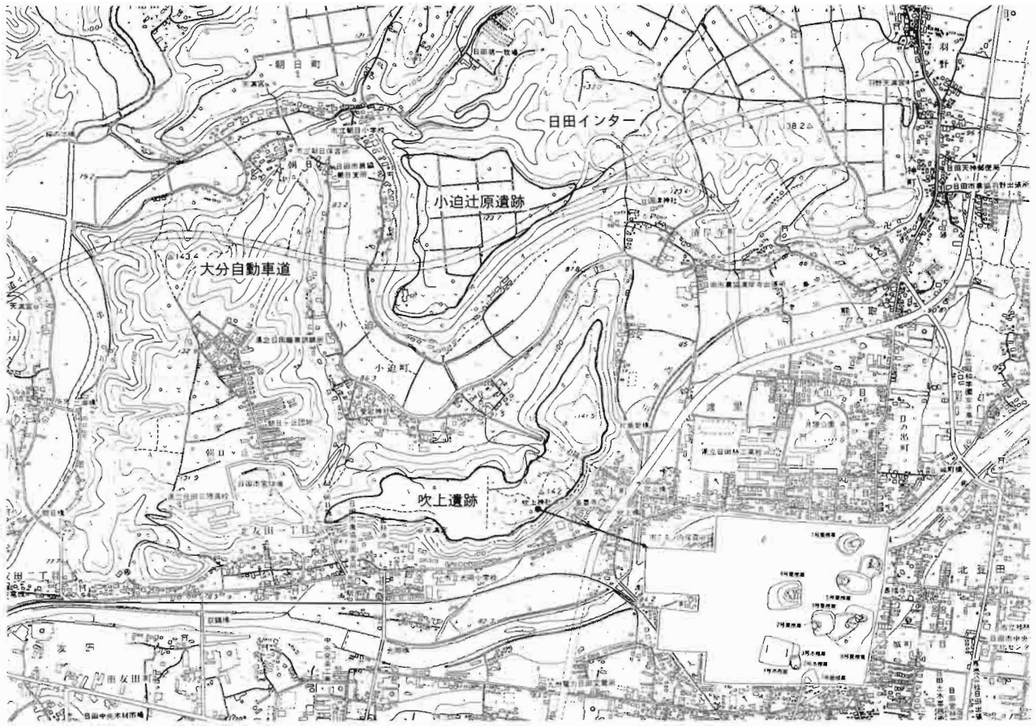
歴史の息づく日田のまちづくりの中で

小迫辻原遺跡が、他ならぬ山紫水明の観光地として知られる日田市に発見されたことも大きな意味を持っていよう。近年は豆田地区における近世の天領日田の町並みの保存整備もめざましい成果をあげている。小迫辻原遺跡の整備は、こうした日田の恵まれた歴史と風土にさらに大きな付加価値を加えるものとなる。

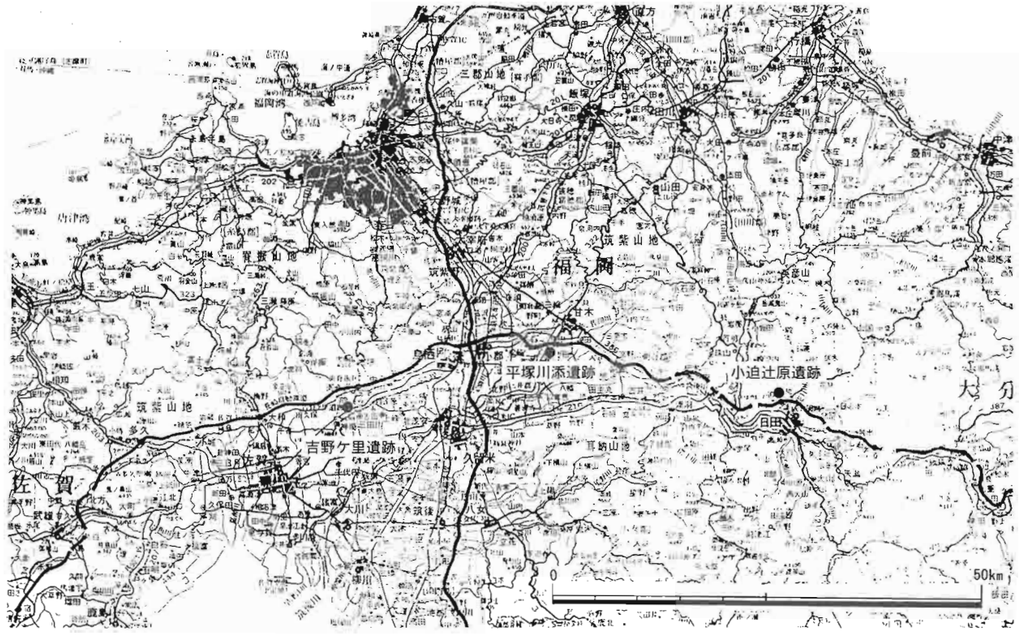
吉野ケ里遺跡－平塚川添遺跡－小迫辻原遺跡というネットワークを、いわば小迫辻原遺跡整備構想のヨコ糸とすれば、日田の恵まれた歴史と風土の中での位置付けは、そのタテ糸といえよう。小迫辻原遺跡の保存整備にあたって、この両面をしっかり考慮にいれた構想が望まれる。



吹上遺跡6次調査遺構配置図



小迫辻原遺跡と吹上遺跡の位置図



吉野ケ里・平塚川添・小迫辻原遺跡の位置図

パネルディスカッション　小迫辻原遺跡と日田のまちづくり

（コーディネーター）

後藤宗俊

（パネリスト）

岡村道雄

・おかむら　みちお
・文化庁記念物課主任文化財調査官
・1948年生まれ
・新潟県上越市出身

高島忠平

・たかしま　ちゅうへい
・佐賀県教育委員会文化財課長
・1939年生まれ
・福岡県飯塚市出身

折尾　学

・おりお　まなぶ
・福岡市埋蔵文化財センター所長
・1944年生まれ
・福岡県飯塚市出身

川端正夫

・かわばた　まさお
・甘木市教育委員会主任技師
・1959年生まれ
・大阪府堺市出身

中川千年

・なかがわ　ちとし
・小迫辻原遺跡研究会会長
・1931年生まれ
・大分県日田市出身

大石昭忠

・おおいし　あきただ
・日田市長
・1942年生まれ
・大分県日田市出身

渋谷忠章

・しぶや　ただのり
・大分県教育委員会文化課主幹
・1946年生まれ
・大分県直入町出身

日田市の概要

大分県の北西部に位置する日田市は、総面積269.21km、東西の長さ約22.3km、南北の長さ約24.8km、人口約６万４千人の街です。北部九州のほぼ中央にあり、福岡市・大分市・北九州市・熊本市などの都市圏へは車で約１時間という、地の利にすぐれたところです。

市の中央部には大小幾つもの河川が注ぎ込み、やがて九州の最大河川筑後川となります。その豊富な水源は古くより“水郷（すいきょう）日田”の名で親しまれてきました。周囲を山々に囲まれた盆地地形は、内陸特有の自然現象をひきおこします。冬季に発生する底霧は、日田の風物詩でもあります。

広い森林に恵まれた日田の基幹産業は林業や木材関連産業で、森林の半数以上を占める杉は“日田杉”の名で全国に知られています。また、台地開発により整備された農地では、スイカやナシなどの農作物の生産が行われ、今や日田のブランド商品となっています。

古代から交通の要衝であった日田は、各地との交流が盛んで、独自の文化を形成してきました。特に江戸時代には幕府の「天領」が置かれ、九州の政治・経済の中心地として、高度な町人・商人文化が発達し、学聖広瀬淡窓（たんそう）に代表されるように学問や文化が大きく開花しました。

このような歴史の街日田には、その面影を残す数多くの文化遺産が残っており、歴史と調和したたたずまいは九州の“小京都”とも呼ばれています。隈・豆田（まめだ）両地区に残る歴史的町並み、日田の夏を彩る日田祇園（ぎおん）祭り、伝統技術を伝える小鹿田焼（おんたやき）、日田の名物である鵜飼（うかい）や屋形船などは、日田の長い歴史と自然環境のなかで生まれ、今日まで継承されています。

参考資料

福岡市の史跡整備

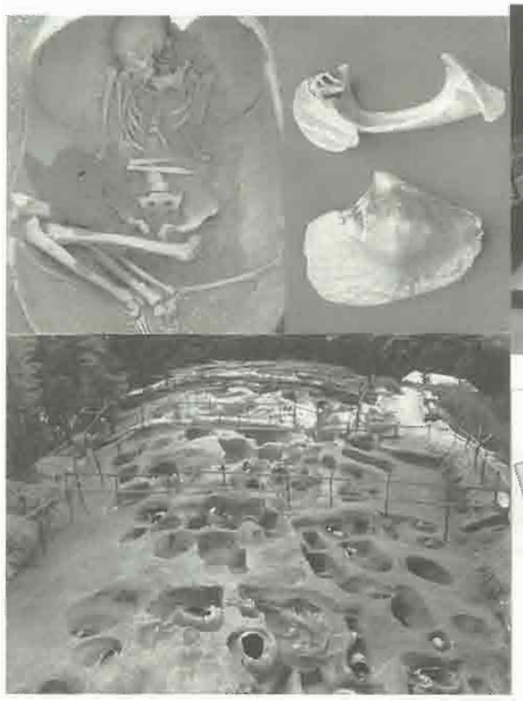
福岡市埋蔵文化財センター　折　尾　　学

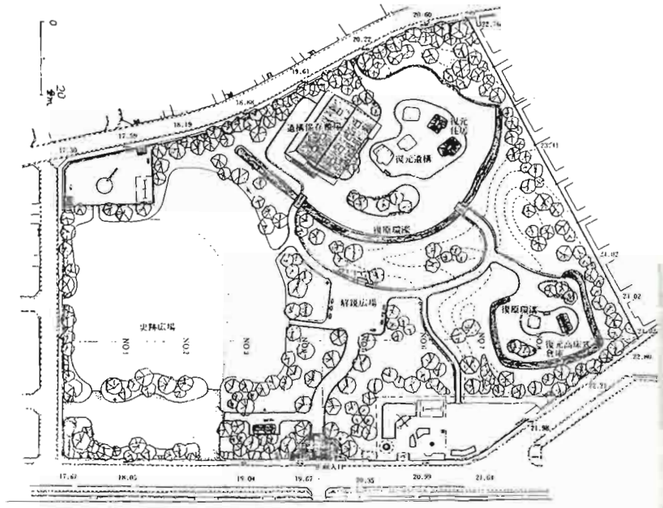
福岡市の面積は336.82平方キロメートルあって、遺跡は約144平方キロメートルあります。開発に伴って毎年60ヶ所約10ha、0.1平方キロメートルの調査を行なっております。本市の埋蔵文化財行政が本格化したのが、昭和44年（1969）でありますから、今年で27年目を迎えていますが、消化した遺跡の発掘調査面積は単純計算で約2.7平方キロメートルです。この試算から将来の本市の発掘年数を弾くと1413年ということになります。

いずれにしましても、半永久的に続く遺跡発掘調査に対する理解を、行政、市民等から得るために史跡の整備を始めました。最初の史跡整備は昭和60年（1985）竣工の金隈遺跡です。この整備は、発掘された弥生時代の甕棺墓群に覆屋をかけて、発掘状態のまま公開するというものです。結果的に大変好評を博し、以後、野方（弥生後期の集落）、板付（弥生時代最古のムラ）、鴻臚館跡（古代奈良・平安時代の迎賓館）等、史跡を整備をすることができました。現在、日本最古の王墓としてマスメディアに認知された、吉武高木遺跡について、史跡整備委員会で整備内容を検討中ですが、先学諸兄の議論を行政的に権威化して、実のあるものにして行きたいと思います

史跡整備の課題として、1．発掘の検出資料を徹底的に学際的に討議すること。2．許される範囲で仮説をたて、民俗資料も参考にすること。3．市民に古代のロマンを与えること。4．整備後の活用を考えること。5．史跡と史跡のネットワーク化を図ること等を個人的には考えております。

おかげさまにも、福岡市は「遺跡等の歴史を生かした街づくり」を市のマスタープランに取り入れ21世紀に向かうことを、本市内外にアピールしているところであります。多くの人のご意見を戴きながら21世紀に耐えられる史跡整備を考えて行きたいと思っております。

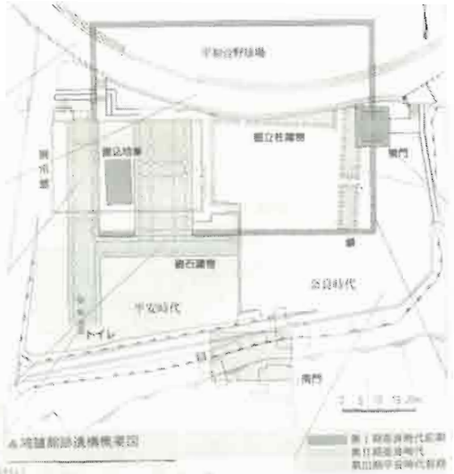


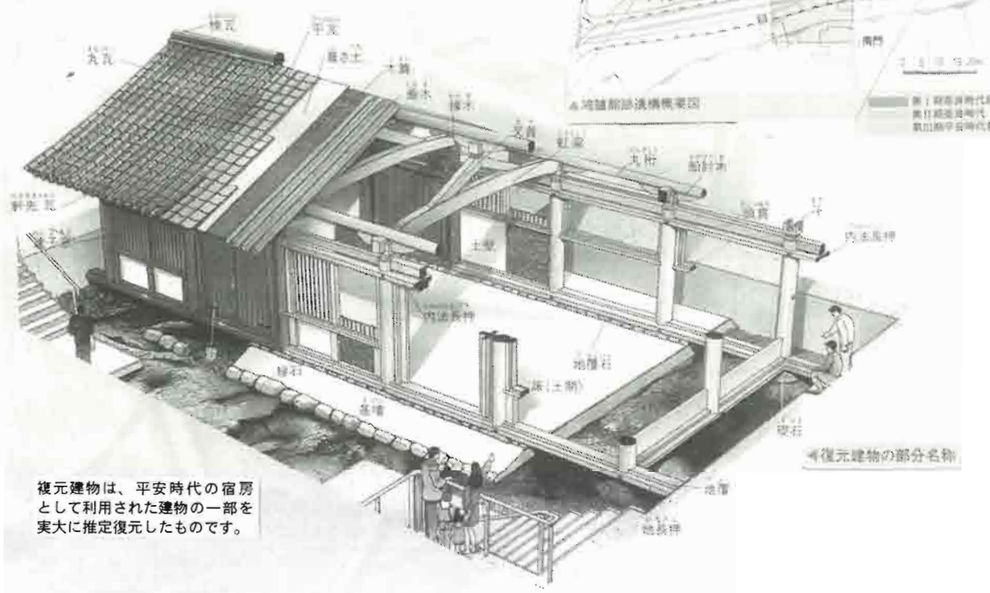


野方遺跡環境整備基本設計平面図

鴻臚館跡展示館

▲整備された鴻臚館跡（鴻臚館跡展示館と遺跡公園）





復元建物は、平安時代の宿房として利用された建物の一部を実大に推定復元したものです。

参考資料

吉野ケ里遺跡の保存と活用

佐賀県教育委員会　高　島　忠　平

1　遺跡の魅力と役割

国民的とも言える吉野ケ里遺跡への関心は、爾来からの古代史ブームと日本人が邪馬台国に自らの歴史的アィデンティティーを求めていること、更に知的要求への高まりにあると言える。また、吉野ケ里遺跡の周辺の田園と自然そして空の広がりは、失われつつある「記憶の風景」を遺跡２千年、悠久の歴史空間に立って体感できる歴史的環境であって、この遺跡の主要な魅力となっている。更に、遺跡の発掘調査をはじめ、現在も調査研究が継続中である。これは見学者が遺跡の発掘調査の現場を目の当たりにできるといった魅力であると同時に、原始・古代史の新しい情報を、常に吉野ケ里遺跡から発信し、「吉野ケ里」を全国の遺跡の最大のブランドとして人々の注目を集めているところでもある。

吉野ケ里遺跡は、歴史学上、極めて学術的に価値の高いものを持っているが、同時に、人のこころとからだにとっても快適な生活環境として重要な価値を持っている。

2　これまでの遺跡の保存整備とこれからの保存整備

これまでの保存整備は、遺跡を破壊と煙滅から守ることを第一義的にしてきたところがある。このことは明治以降の近代化や大戦後の経済復興・経済成長政策による国土開発、盗掘等の破壊から遺跡を守ることでは積極的な意味を持っていた。特別史跡平城宮跡における操車場やバイパス建設、東名・名神高速道路建設等による大規模な遺跡破壊、群小の地域開発による無数の遺跡破壊から幾らかでも遺跡を現状保存するのが、文化財行政の基本姿勢であった。そういう中で、環境整備と言うことで、公園的手法を用いて遺跡・史跡の整備が行われていたが、現状保存第一で、遺構の表面標示の枠を大きく出るものではなかった。また、文化財行政関係者の中には、史跡は手を加えず、現状で保存するのが最も適切、とする考えが根強くあって、整備も保存修理として進められた。遺跡を破壊から守ることは一般市民の共感と参加とがあって成されてきたが、守られた遺跡の多くはそのまま放置された。そうした現状に満足できない一般市民や文化財行政関係者のなかに、遺跡・史跡の積極的な活用を図ろうとする動きが出てきた。

特別史跡登呂遺跡は、大戦直後に発掘調査され、弥生時代の農村がそっくり出土した。住居あり、倉庫あり、水路・水田あり、そして土器や石器等当時の生活用具が大量に発見され、２千年前の農村風景が一挙に出現した。当時としては、異例の整備が実施され、住居・倉庫・水路・水田が当時の農村を再現する形で復元された。これを我々は典型的な弥生の風景として、今日まで理解してきた。しかし、これは例外で、他の遺跡では復元といっても１・２棟の建物がモデルハウス的に復元されたに過ぎなかった。

こうした復元は全国各地で試みられたが、復元のための資料不足、対象遺跡の基本理解と整備計画理念を明確にしないままに行われたので、一部を除いて活用されなかったり、その遺跡におよそ馴染まない別の手が加えられ、本来の遺跡とは無縁の景観を呈している。登呂遺跡も例外ではない。更に一時はもて囃された復元もパターン化され、何処にでもある物となり、メンテナンスも不十分で放置に近い物もあって、当初の魅力が消失してきている。復元はもともと根拠の薄いところで行われるので、一つの復元に対して専門家の異論が多い。そのことは当然であるが、復元そのものに批判的か、消極的な専門家の復元に否定的な発言は、復元を唯一且つ絶対と確信する専門家と同様、遺跡の価値を享受する立場の一般市民に不可解と映る。市民は復元が「その程度」である事を知っているのであり、専門家の考えを聞きたいのである。

史跡五色塚は当初の姿に復元し、現状の一般の古墳のように緑に覆われた物とは視覚的に全く違ったハードな墳丘を見せようと試みられた。本格的な、新しい整備事業で、この整備を契機に、徐々に、全国的な復元整備をもとに、遺跡の活用を図ろうとする動きが出てきた。現在、文化庁は復元等判りやすい史跡整

備事業として「ふるさと歴史の広場」・「古代ロマン事業」を推進している。遺跡・遺構から当時の姿を復元し、一般の人の遺跡の歴史的価値を理解する助けにするためには、当該遺跡の正格な基本理解とどのように活用を図って行くかの整備理念とが不可欠の識見で、整備事業フローの第一の作業となってくる。

3　吉野ケ里遺跡の歴史公園化にあたっての保存活用の考え方

歴史公園は吉野ケ里遺跡にとっては整備方法の一つであり、全てともなり得る物である。特別史跡そのものを国・県営公園として、直接整備するのは国営飛鳥歴史公園でもなかったことである。史跡と公園とは、近世と近代初期では歴史的名園・名勝を公園そのものとして位置付けていたようであるが、近代化が進められる過程で西洋の公園思想と手法が公園整備の主流となるなかで、両者は別々の歴史を辿りながら今日に至っているようである。それぞれの問題と課題とをもっているが、整備方法と整備技術の優れた熟成度があり、これらを駆使して吉野ケ里遺跡の公園整備が進められることになろう。

吉野ケ里遺跡の歴史公園としての保存活用にあたっては先述した遺跡の学術的価値と社会的価値を踏まえると、次のような整備活用の考え方がみちびき出される。

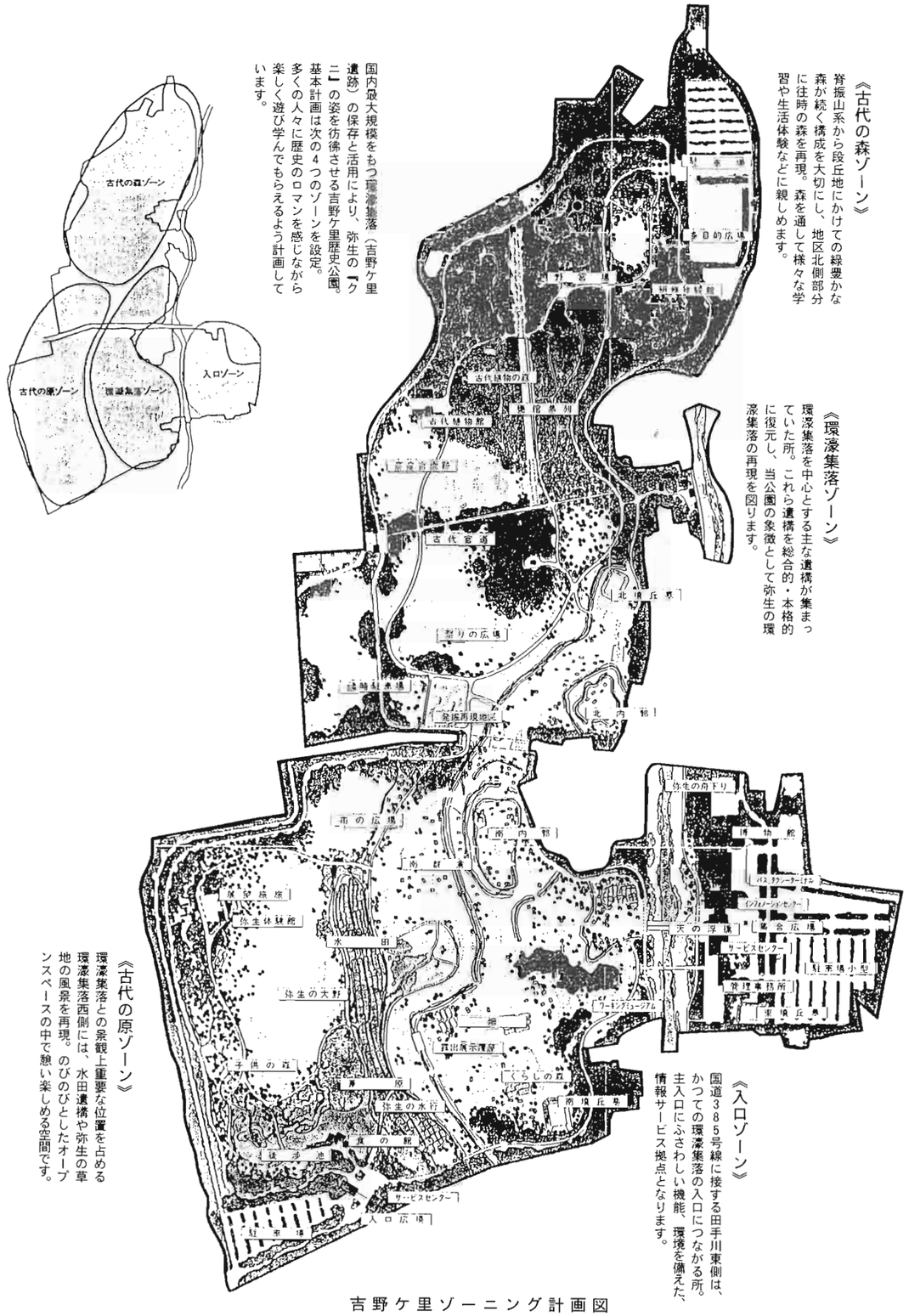
まず整備活用にあたっての基本的な姿勢が三点あると考えられる。第一に守る（未来への遺産）。遺跡・遺構の保存が第一義であり、また、周辺の良好な環境も歴史的遺産であるという認識に立つこと。第二に創る（まず遺跡ありき）。遺跡は公園の添景物ではなく、遺跡が主役である。見学者は、そこに一般の公園とは異なる、本物の歴史の香りとロマンを求めて訪れる。第三に活かす（活きた活用）。整備後の活用や運営がより重要な課題。遺跡が常に調査、研究、学習やイベントなどの対象となっている現在進行形の活用を行う。このことが国民の日常生活での快適生活空間となる。

以上の認識に立って、保存活用の方策を考えると次のようになる。①日本の歴史と文化のふるさととする。（クニの成立、マツリの成立）②弥生人の文化と生活を直接体験できる整備を行う。（絹織物、土器、石器、鉄器、米、豚、魚、犬、髪、臼、杵、人骨…）③弥生の原風景を演出した整備を行う。吉野ケ里に代表される森、田、園、川、山並み、の歴史的環境の保全としての公園整備を行う。④環濠集落（竪穴住居、宮殿、物見櫓、城柵、高床倉庫、濠、墳丘墓、祭場、水路、水田…）の再現。魏志倭人伝の世界の具体像としての吉野ケ里遺跡を表現する。⑤国際交流の場とする。東アジア文化圏の中の吉野ケ里文化。（青銅器、管玉…）⑥吉野ケ里遺跡を含め関連する遺跡の調査研究を継続的に実施し、遺跡の新しい情報を、常に発信する。⑦広く国民が発掘調査の状況を見学し、更に発掘調査等に参加できる体験型歴史公園。⑧現代社会のオアシスとして機能する、快適空間の歴史公園とする。⑨『未来への遺産』吉野ケ里遺跡の総合的な理解と継続的な調査研究及び保存活用の拠点としての「博物館施設」を備える。原始・古代史研究の国際・国内の情報交流基地、国民の多様な視点に応じれる展示構成とする。⑩吉野ケ里歴史公園の管理・運営にあたっては、広範な人々の多様な要求に応え得るような活用を行える組織団体を設立する。

4　まとめに換えて

これまで、吉野ケ里遺跡の保存と活用について、その基本となる考え方を概略的に述べてきたが、これらは決して特別なことではなく、今全国で求められている、新しい地域作りの考え方と同じ指針を示しているものと言えよう。すなわち、その地域の歴史的特性、環境の特性、住民生活の特性、これらがその地域全体の特性となって、新しい地域作りの基本となり、これらを踏まえて、具体的な地域作りの計画となるのである。しかも、計画段階において、ハード面での整備と共に、いかに活用していくかというソフト面での計画作りを同時に行っていく必要性が重視されている。換言すれば、遺跡・史跡整備や公園整備といったものが、新しい地域作りの核として、あるいは、極論すれば地域作りそのものとして、全国的な注目が集められているといっても過言であるまい。

こういった意味において、今回の吉野ケ里歴史公園は、遺跡整備と公園整備との接点となるものであり、地域作りそのものとしての公園作りを目指すものである。従来の遺跡整備や公園作りの考え方に囚われることなく、大局的、長期的視野に立った斬新な取組みが必要であろう。



《古代の森ゾーン》
脊振山系から段丘地にかけての緑豊かな森が続く構成を大切にし、地区北側部分に往時の森を再現。森を通して様々な学習や生活体験などに親しめます。

《環濠集落ゾーン》
環濠集落を中心とする主な遺構が集まっていた所。これら遺構を総合的・本格的に復元し、当公園の象徴として弥生の環濠集落の再現を図ります。

国内最大規模をもつ環濠集落（吉野ケ里遺跡）の保存と活用により、弥生の『クニ』の姿を彷彿させる吉野ケ里歴史公園。基本計画は次の4つのゾーンを設定。多くの人々に歴史のロマンを感じながら楽しく遊び学んでもらえるよう計画しています。

《古代の原ゾーン》
環濠集落との景観上重要な位置を占める環濠集落西側には、水田遺構や弥生の草地の風景を再現。のびのびとしたオープンスペースの中で憩い楽しめる空間です。

《入口ゾーン》
国道385号線に接する田手川東側は、かつての環濠集落の入口につながる所。主入口にふさわしい機能、環境を備えた、情報サービス拠点となります。

吉野ケ里ゾーニング計画図

参考資料

平塚川添遺跡の史跡整備

甘木市教育委員会　川　端　正　夫

遺跡の概要

平塚川添遺跡は、福岡県と甘木市が共同で開発にあたった「平塚工業団地」造成事業に伴う事前調査で発見され、平成３年から５年にかけて調査された。翌６年に国指定史跡に指定され、同７年から史跡公園としての整備が実施されている。

小石原川中流域の低台地際に弥生時代中期から古墳時代初頭（紀元前１世紀～後４世紀頃）にかけて営まれた大規模な低地性の多重環濠集落で、弥生時代後期後半（紀元２～３世紀）のいわゆる「邪馬台国」時代に多重の水濠と共に盛期を迎えた。

小石原水系の湧水に発する小河川を利用して造られた環濠は集落を三重に囲み、中央の集落の周りに複数の小集落群（別区）を区画していて、それらは倉庫区画や工房区画などに分化した集落機能を担っていたと推定されている。また、集落の中央部には大型の掘立柱建物群跡が発見されるなど、中国史書に言う当時の「クニ」を構成する集落の構造をよく示している。

すぐ北東に隣接した平塚山の上遺跡などと併せて、当時のこの地域の拠点的集落と考えられる。遺物としては、多量の生活土器の他、鍬など当時の木製生活用具や柱などの建築部材がよく遺存していた。また、環濠内からは当時の花粉や樹葉などの植物遺体が出土しており、当時の植生などの環境復元の材料を提供している。

整備の基本方針

⑴「水郷」の景観づくり…低地に営まれ、水濠が何重にも巡らされた環濠集落の景観をつくり出すため、遺跡を囲む水濠の復元を行う。また弥生時代の植生を調査結果を基に復元し、豊な緑に囲まれ、水郷に浮かぶ集落の復元を行い、弥生の「水郷」の景観づくりを演出する。

⑵クニの中核的集落の姿を示す…中央集落から発見された４棟の大型掘立柱建物と、これを囲む竪穴住居、周囲小集落（別区）から発見された工房跡、倉庫跡等の整備を行い、計画的・機能的な空間配置をもつ集落の姿を示す。

⑶企画性に富んだ開かれた遺跡の活用…各種体験学習を中心に、企画性に富んだ活用事業を積極的に推進し、広く楽しめる開かれた遺跡とする。

⑷来訪者のサービスの充実…四季を通じて来訪者が憩い楽しめるよう、充実した各種サービスが提供できる場としていく。

⑸発掘調査の継続・公開…今後とも計画的な発掘調査を行い、遺跡の研究を継続していくとともに、これを広く公開していく。

⑹歴史・観光ネットワークの拠点づくり…福田台地遺跡群や秋月等のネットワーク化を目指し、甘木市の歴史・観光の拠点の一つとしていく。

整備の課題

１）古代ロマン再生事業のソフト（プログラム）づくり

弥生集落整備例の一般的ソフトからの取込み（ア）と平塚川添遺跡独自のソフト（イ）の開発。（ア）も（イ）もボランティア人材育成を要するので、「資料館」・「愛する会」などと共に準備活動を展開する必要がある。（イ）で、現在「愛する会」・「庁内ワーキング会」他で出ているのは、①サギッチョ、②盆綱引き、③小動物（兎・鶏・鴨など）の狩猟・解体・料理、④弓矢での的当て

２）集落景観復元での課題

①広場・聖樹（シンボルツリー）・聖地（水分？）・畑・竹藪（真竹・矢竹）

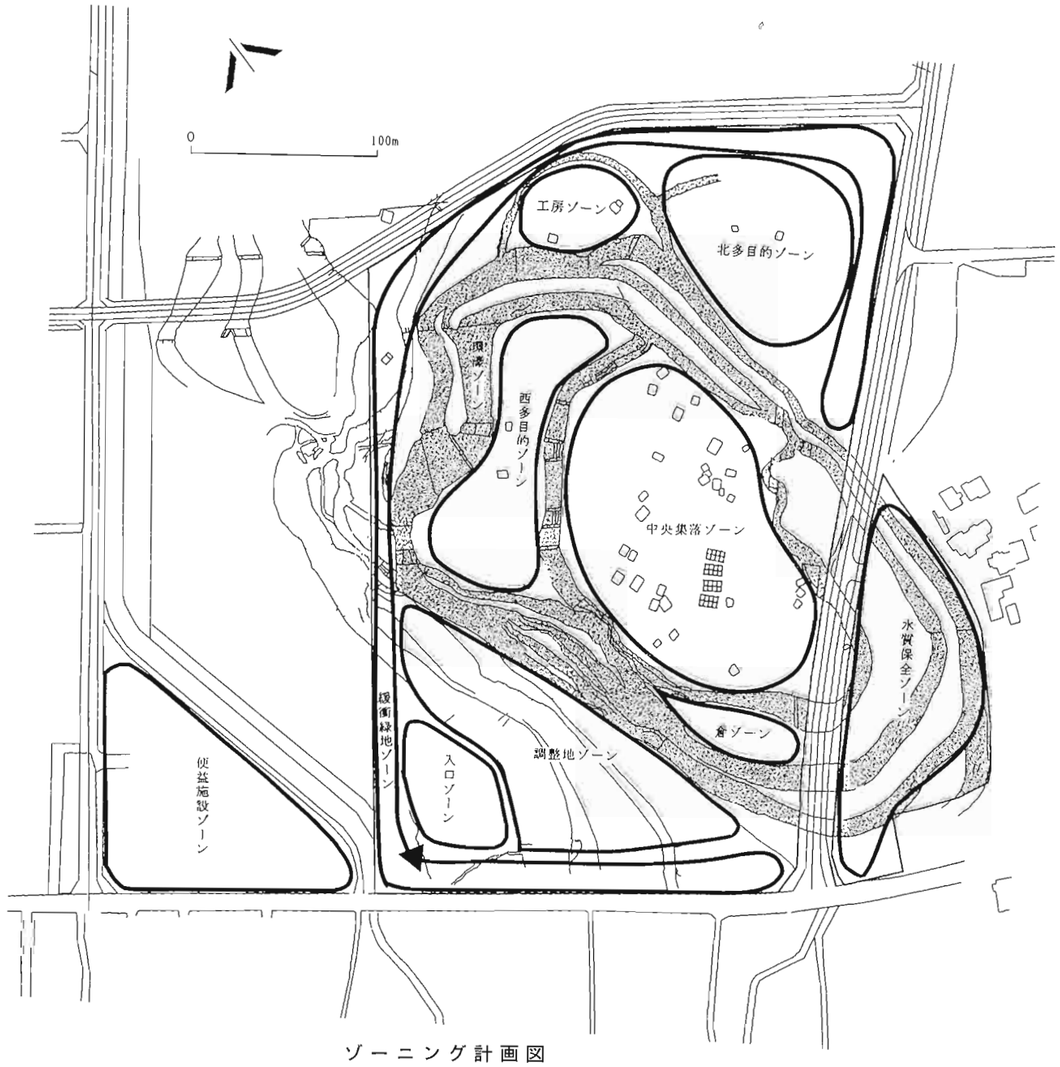
②入口・出口と門（鳥居など）、集落から水田や墓所への道

③高床や土間建物の、倉庫や住居等の性格規定（集落構造の想定）。その他建物関係では住居（竪穴・土間・高床）・穀倉・武器庫・工房・作業小屋・物置・干場・便所・神殿・祭殿・首長居館・集会所・水場・井戸・貯木場・材木置場・薪置・蚕小屋・粘土置場・繊維干し場・筵・網置き場

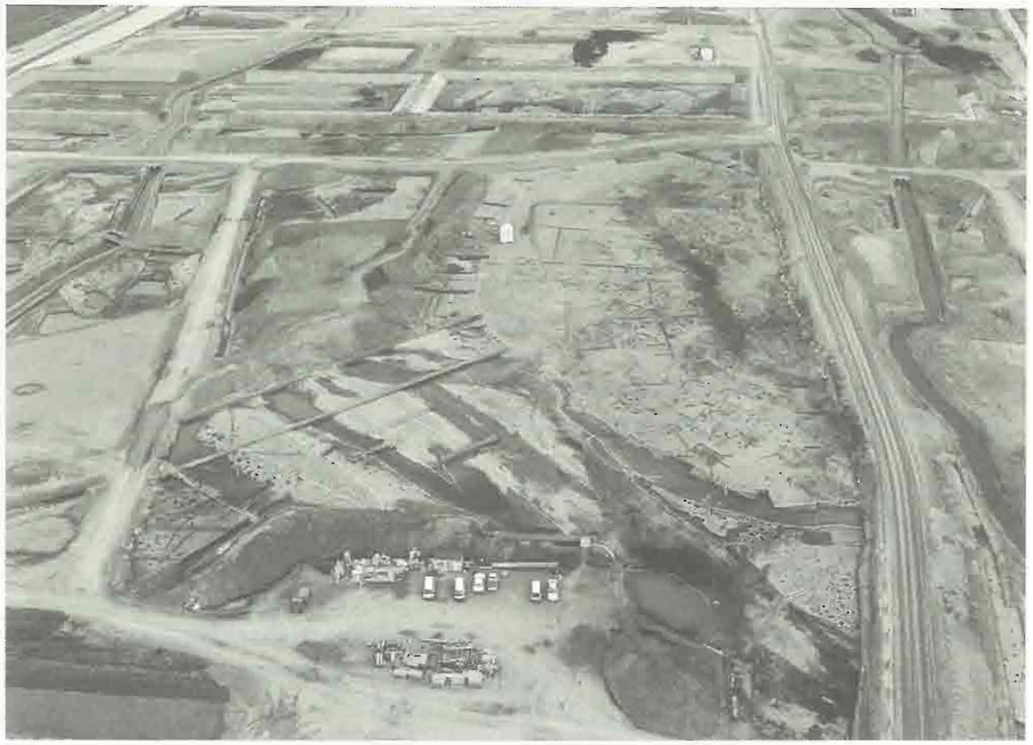
④家畜として、ブタ・イノブタ・兎・犬・鶏・水鳥（放し飼いができなければ柵で囲って飼う）

⑤植物（ヨシ・ガマ・クワイ・ハス・ヒシ・ジュンサイ・セリ・ヨモギ・ソバ・ウリ・ヤマイモ・フキ・ツワ・オニユリ・ウバユリ・ワラビ・ゼンマイ・ヒガンバナ・クズ・カキ・クリ・シイ・マテバシイ・ヤマモモ・ムク・ヤマザクラ・ヤブツバキ・ヨシ・ガマ・ハンノキ・ヤナギ・カヤ・ススキ・ヒョウタン・ウルシ・クス・タブ・アラカシ・シラカシ・ウラジロカシ・ツブラジイ・クワ）

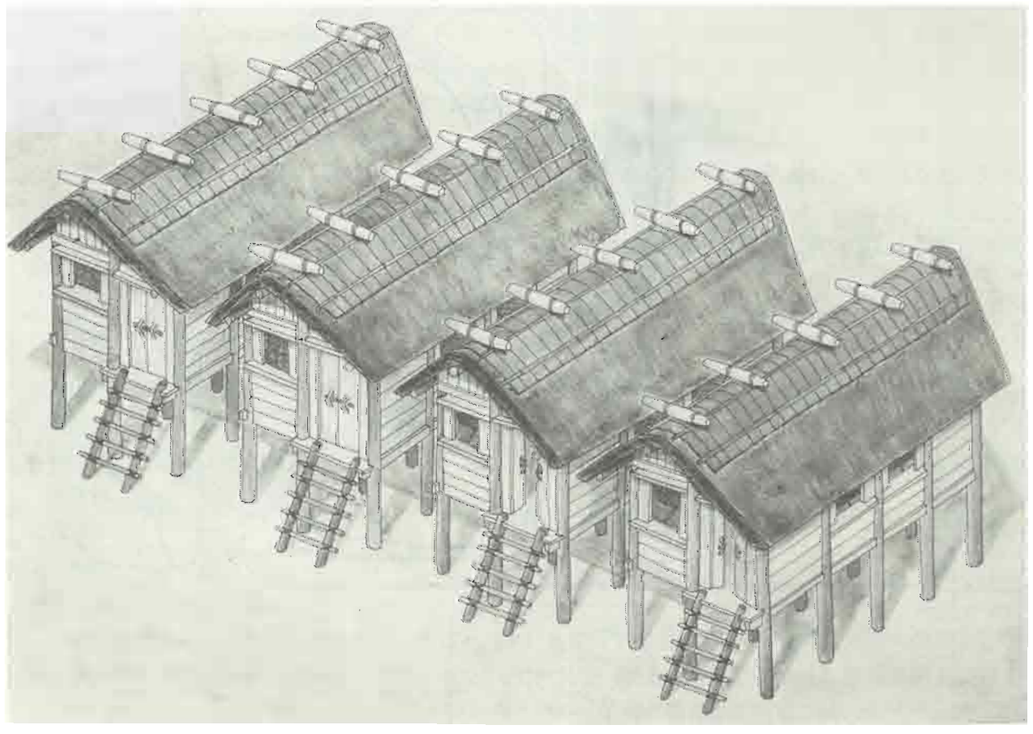
⑥畑作（ヤマイモ・サトイモ・ソバ・フキ・ツワブキ・ユリ・ハス・ジュンサイ・ヒシ・クワイ・アワ・ヒエ）



ゾーニング計画図



平塚川添遺跡全景（南より）



「高殿」の復元図（宮本長二郎氏原図）による

参考資料

大分県の遺跡整備

大分県教育委員会　渋　谷　忠　章

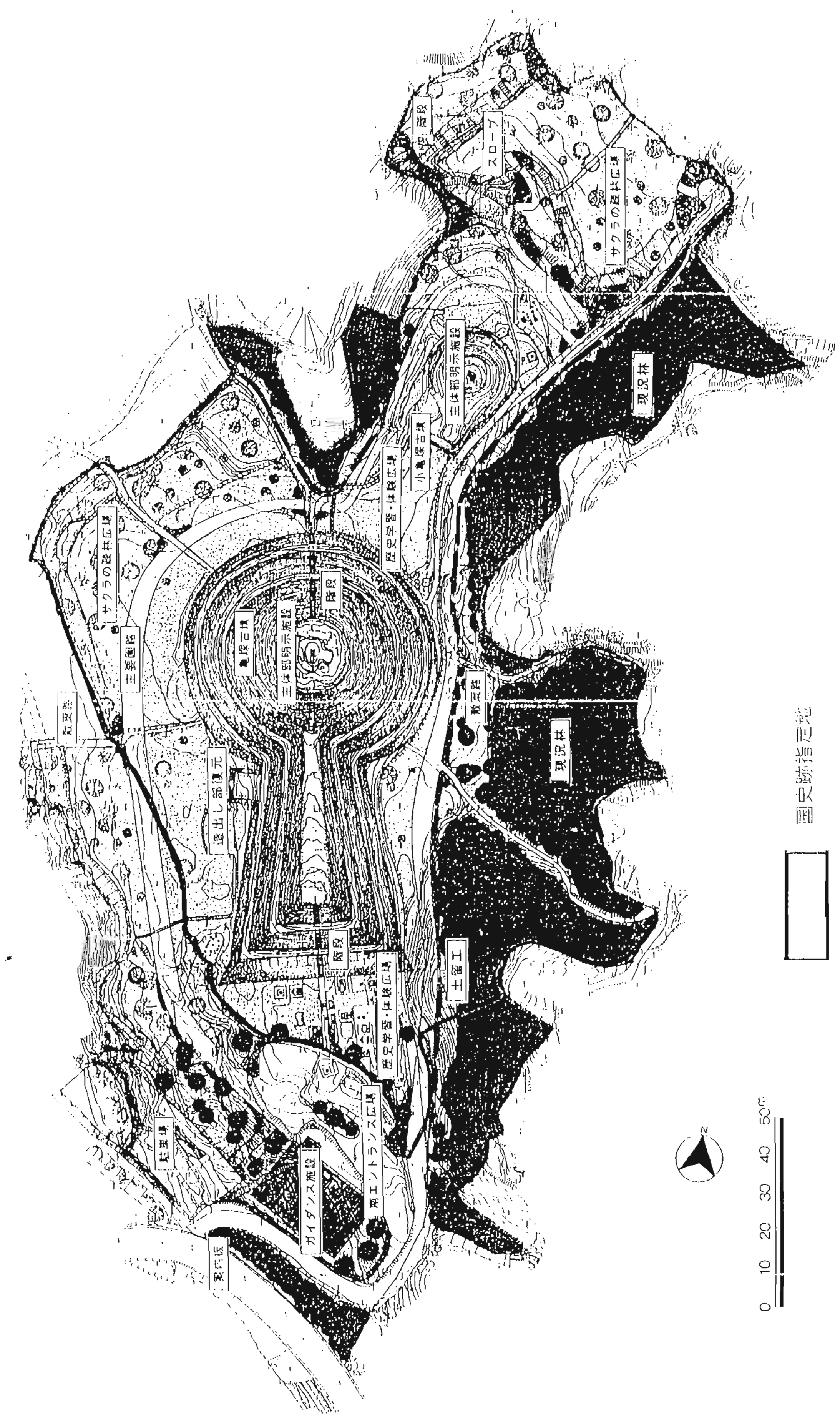
大分県における遺跡に限っての整備・活用を概観したとき、それは必ずしも十分とは言えない状況であったが、近年、ようやく遺跡整備の必要性が認識され、整備事業への取り組みも活発化してきた。遺跡全体の本格的な整備事業を見ると下記のとおりである。

発掘調査で発見され保存の措置を講ずることとなった遺跡については、10数年前までは現状保存が主であった。しかし、現状保存のままでは市民に理解が得られず、また地権者との間にトラブルが生ずることも多い。一方、行政側からすれば、土地の公有化・保存整備ということが望まれるが、多額の予算が必要となる。

近年、大分県内でも文化財保護の気運は高まり、遺跡整備も除々に事業化されているものの、例え、公有化・保存整備が図られたにしても、その後の維持・運営といった面での課題があることも否めない。そのために今後の遺跡整備は、発掘の成果を十分ふまえたうえで、市民にわかりやすく、歴史を体感できるような整備を行うとともに、各世代の人々に広く活用されるような積極的な活用施策を研究することが急務の課題である。

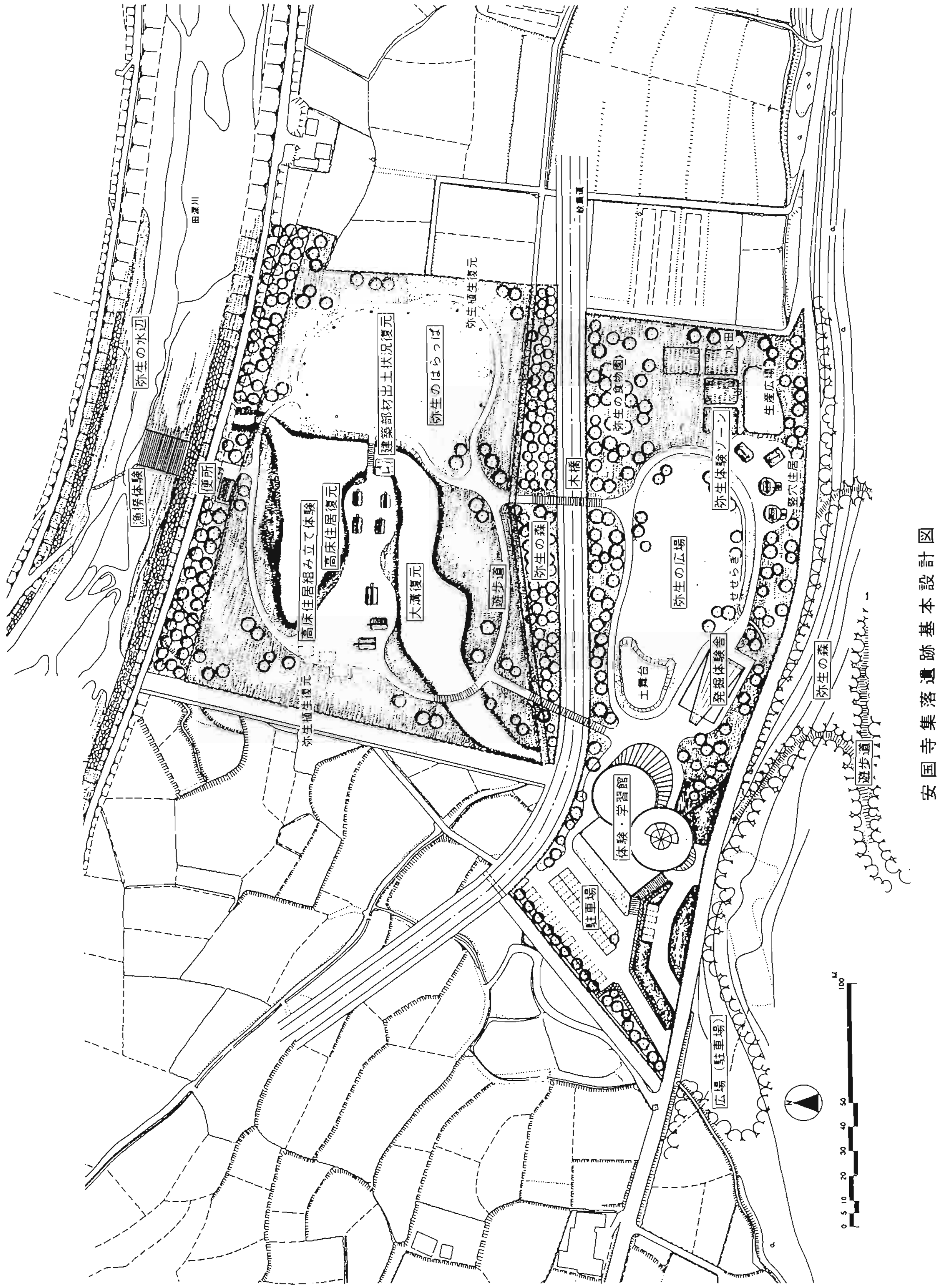
大分県の保存整備事業一覧表

番号	指定	史跡名	事業主体	整備期間	備考
1	国指定	豊後国分寺跡	大分市	昭和60年～平成3年	
2	〃	岡城跡	竹田市	昭和60年～	
3	〃	川部・高森古墳群	大分県	昭和60年～	
4	〃	古宮古墳	大分市	平成4年～平成7年	
5	〃	安国寺集落遺跡	国東町	平成8年～平成12年	大規模遺跡総合整備事業
6	〃	亀塚古墳	大分市	平成8年～平成10年	ふるさと歴史の広場
7	県指定	光岡城跡	宇佐市	平成2年～平成3年	
8	〃	臼杵城跡	臼杵市	平成3年～	
9	市指定	割掛遺跡	豊後高田市	平成6年	地域文化財保全事業



国史跡指定地

大分市亀塚古墳整備計画図



安国寺集落遺跡基本設計図

対　談　歴史がいきづくまちづくり

竹　下　景　子

・たけした　けいこ（本名　関口景子）
・愛知県名古屋市出身
・東京女子大学卒業
・昭和48年NHK「波の搭」でデビュー。その後もテレビ番組、TBS「クイズダービー」などのレギュラー番組やNHK「大河ドラマ」、TBS「東芝日曜劇場」などのドラマに数多く出演。また、松竹「男はつらいよ」のマドンナ役も演じ、「望郷」「学校」では優秀助演女優賞を受賞。

岡　村　道　雄

大　石　昭　忠

メ　モ

まちづくりフォーラム'96

黎明の比多国

－小迫辻原遺跡の世界－

主　催／まちづくりフォーラム'96開催実行委員会・大分県教育委員会・別府大学・日田市・日田市教育委員会

後　援／文化庁

協　賛／ＪＲ九州・日田バス

組　織／〔実行委員会〕

委員長	大石　昭忠	（日田市長）
副委員長	田中　恒治	（大分県教育委員会教育長）
〃	西村　俊一	（別府大学学長）
委員	加藤　正俊	（日田市教育委員会教育長）
〃	高瀬　恒太	（日田市自治会連合会会長）
〃	石丸　邦夫	（日田観光協会会長）
〃	原田　勝宏	（日田考古学同好会会長）
〃	中川　千年	（小迫辻原遺跡研究会会長）
〃	矢野　益子	（日田市消費者婦人団体連絡協議会会長）

〔実行委員会事務局〕

事務局長	原田　俊隆	（日田市教育委員会文化課課長）
事務局次長	長尾　幸夫	（〃　課長補佐兼文化財係長）
事務局員	渋谷　忠章	（大分県教育委員会文化課主幹兼埋蔵文化財第２係長）
〃	玉永　光洋	（〃　主査）
〃	西　哲弘	（〃　主査）
〃	森山　一宏	（日田市教育委員会文化課主任）
〃	土居　和幸	（〃　主任）
〃	行時　志郎	（〃　主事）

まちづくりフォーラム'96

黎明の比多国（れいめいのヒタコク）

－小迫辻原（おざこつじばる）遺跡の世界－

平成８年11月８日発行

まちづくりフォーラム'96開催実行委員会

大分県教育委員会・別府大学・日田市・日田市教育委員会

印刷・製本　尾花印刷有限会社